キャッチボール

阿門　遊

一回表

　真実はどこにある。そんなものはどこにもない。だから、僕たちは、四方八方に真実という名のボールを投げ続ける。空に、地面に、壁に、そして、あなたに。ボールを受け止めたあなたは、他の誰かにパスをする。ナイス、ボール。ナイス、キャッチ。

　一回表

「あれっ、あんなところで、何か光っているぞ」
　晴れた日の夏の夜、星の学習を兼ねて夜空を見上げていると、北斗七星のひしゃくの柄の端に、かすかな輝きを見つけた。今、まさに生まれた星かな？新星だったら、北斗七星が、北斗八星になるな。僕が、幸運にも、この星を世界で初めて見つけたのなら、僕の名前をつけてくれるのかな？それとも、もう既に、他の誰かが見つけて、名乗りを上げているかもしれない。まてよ、あの輝きは、新星じゃなくて、謎の未確認飛行物体、ＵＦＯかもしれないぞ。
　僕は、ポケットの中の携帯電話を取り出し、デジタルカメラモードに切り替え、何万、何十万、いや、何百万もの、数え切れない程の星がまたたく夜空にかざした。カメラ越しに見るＵＦＯ星は、どんどんと明るさを増し、膨張している。そんな、不思議なことがあるものかと、僕は、カメラから目を離し、自分の目で確認しようとした。その間にも、星はずんずんと大きくなって、間違いなく、僕の方に向かって飛んできている。やっぱり、ＵＦＯか？
　それじゃあ、ＵＦＯは、一体何の目的で、地球にやってくるんだろう。ひょっとしたら、人類を征服するため、実験材料として、僕を捕まえに来ているのだろうか。まさか、六十億人が住んでいるこの地球で、年賀状の宝くじの切手シートさえ当たったこともないこの僕が、選ばれるわけなんてありえない。そんな話は、テレビや映画の中の世界のことだと思い、ＵＦＯ説を全面的に馬鹿にしながらも、否定しきれない自分がいる。
　不安をかき消すため、さっきよりも両目を飛び出んばかりに大きく見開き、自分の方に向かってくる謎の物体の正体を確かようとした。あれ、何か、丸い形をしているぞ？星でもなく、ＵＦＯでもなく、球形だ。鳥の卵か？まさか、巣に帰ろうとしていたカラスの雌が、急に産気づいて、飛びながら空中で卵を産んだのか？いやいや、謎の物体は、卵型じゃない。まん丸だ。サッカーボールか、バスケットボールか、それともドッジボールなのか？
　旅客機の中で、暇を持てあました子どもがボール遊びをしていて、あまりに強く蹴りすぎたため、ボールが機内の窓ガラスを突き破り、外に飛び出したのだろうか？まさか、そんなに簡単に、飛行機のガラスが割れるわけはないし、ボールは、当然、機内に持ち込み禁止だろう。それじゃあ、謎の物体の正体は何？
　遥か彼方からの旅行者の存在は、接近するに従って、大きさと形がはっきりとしてきた。謎の訪問者の正体は、まさにボールだった。それも、バレーボールでもなく、ハンドボールでもなく、野球のボールだ。
　どうして、野球のボールが、空から降ってくるのだろう？僕の通っている家の側の小学校のグ

ラウンドで、夜間開放の時間に、野球の練習している大人たちの誰かの打球が、僕の家まで飛んできたのかな。それなら、特、特、特、特大ホームランだ。普通の人のレベルでは、こんなに遠くまで、ホームランは届かないはずだ。

今、アメリカの大リーグで活躍している僕の憧れの井松選手なら、間違いなく打てる。もしかして、井松選手が、日本に帰ってきているのかな。ここ数日の、スポーツ新聞には、帰国のニュースは取り上げられてはいなかったけれど、マスコミには内緒なのかも知れない。何か、秘密の目的があって、密かに帰国したのだろうか。それなら、今すぐにでも、小学校のグラウンドに駆けつけないと。できれば、今着ているＴシャツか、愛用のボールやバットにサインをしてもらいたいし、ホームラン王に輝いた井松選手の黄金の左手と握手をしたい。それも適わないのならば、せめて素振りしている姿だけでも、間近で見てみたい。

井松選手の打撃フォームを目で盗み、僕の頭の中でイメージトレーニングを積み重ね、来週の練習試合で試してみよう。井松選手仕込みの打撃フォームならば、それこそ、月まで、北斗七星まで届くホームランが打てるぞ。

そう思う間もなく、ボールは、僕の家に、あとわずか。僕は、勉強部屋をからバルコニーに出て、手すり越しに腕を伸ばす。あと、少しだ。このボールを捕球したら、直ぐに、学校に駆けて行き、井松選手に、ホームランボールにサインをしてもらおう。自分が打ったボールだから、サインは断らないだろう。ほら、あと、もう少し。

このバルコニーには、僕のほかに誰もいない。父も母も、隣の部屋で眠りについている。だけど、気ばかりがあせり、爪先立ちで、体を精一杯伸ばして、ボールを捕球しようとする。北斗八星のうち、地球に落ちてきた夢の星は、僕が掴むんだ。井松選手のように、プロ野球の選手に、そして、日本で活躍した後、大リーグの選手なるという夢を！

一回裏

「スリーアウト、チェンジ」
　主審の声がする。僕は、セカンドフライを、がっちりと両手で掴むと、ボールをピッチャーの大山君に返球した。僕たちの周りには、いつも、野球のボールが転がっていた。僕たちは、キャッチボールで、お互いの心を通わせていたのだろう。
　今日の調子はどうだい。
　肩のことかい。体のことかい。
　結構、いいボールが走っているじゃないか。空中に線路があるわけじゃないのに、コントロールは抜群だね。
　ありがとう。今日は、肩がエンコしないで、僕の言うことを聞いていてくれるのを願うだけさ。君だって、なかなか調子がいいじゃないか。
　ボールが返球される前に、折り返し、お褒めいただいた言葉に対し、お礼を言うよ。ありがとう。
　永遠に続く、言葉のキャッチボール。親から子へ、子から孫へ、友人から知り合いへと。世代を超え、地域を越え、ボールは永遠に転がり続ける。ライク･ア･ローリング・ストーンズ。「あきらめ」という感情を削ぎ落とし、「夢」という願いを膨らませながら。

二回表・二回裏

二回表

「翼、何をしているんだい」
　私が、二階の自分の部屋に入ろうとしたとき、向かいの子ども部屋のドアが開いていた。何気なく、部屋の中を除くと、小学生一年生の一人息子の翼が、床に座りこんで、黙々と、人間の英知の営みに没頭している。つい、その行為が気になって、一歩、二歩と部屋に足を踏み入れた。
　翼は、呼びかけた私の顔を見上げようともせず、床の上に置かれた板状の発泡スチロールと格闘していた。手にはナイフを持ち、慣れない手つきで、発泡スチロールを繰り抜いている。
「学校の宿題かい？」
「違うよ」
「じゃあ、芸術作品の制作かい？」
「芸術って何？人を楽しませること？僕、マンザイやコントなんかのお笑いは大好きだよ。でも、今、僕がしていることは違うよ。ただ単に暇だから、遊んでいるだけだよ」
　よく見ると、発泡スチロールには、翼と等身大の人間と思われる輪郭が描かれていた。
「へえー、大きな人間だね。それに、頭、手、足、胴体と、うまくバランスよく描けているじゃないか」
「大きくなんかないよ。僕と同じ大きさだよ。それに、これを描くのは簡単だよ。発泡スチロールに寝転んだまま、僕の体の周囲を絵取っただけだよ」
「それは面白い試みだね。前衛芸術というわけだ。それで、もう一人の等身大の自分を作って、何をする気なのかい？」
「もちろん、二人でキャッチボールをするためだよ」
「人形が、動き出すのかい？」
「まさか。もう、僕は小学一年生だよ。サンタクロースが、パパだってことも知っているし、漫画のように、人形の鼻を押したら、自分そっくりのコピーロボットになるとも思っていないよ」
「じゃあ、どうするんだい？」
「暇なとき、いつも、家のブロックの壁に向かって、ボール投げの練習をしているけれど、それだけではつまらないから、壁に人形を立てかけるんだ」
「人形に、ボールを投げつけるのか？」
「そんなことしちゃ、折角の、パパのいう芸術作品がこなごなになってしまうよ。バッターの代わりに、立ってもらうんだ。その方が、ピッチャーとして投げるときに、コントロールが付けやすいし、一人じゃつまんないからね。もちろん、デッドボールは、絶対厳禁。ボールが当たれば、骨折して、一か月の重傷になってしまうから。その時は、人形をおもちゃ病院へ運ぶため、携帯電話でパパの車を呼ぶか、救急車に出動を頼むかのどちらかだよ」
「わかったよ。できるだけ、翼に協力するから、救急車は呼ばないほうがいいよ。それより、今から、パパとキャッチボールをやらないか？人形が重症を負わないよう、パパが身代わりになって、キャッチボールの相手をしてあげるよ」

「ありがとう、パパ。でも、もう、ちょっと待ってね。もうすぐ、翼人形の出来上がり。熱中症にならないように野球帽の絵を描いて、コントロールの悪いボールから避けられるように目を描いて、野球観戦を楽しんでいる観客の応援の声がよく聞こえるように耳を描いて、バックネット裏の売り場から出来立てのポップコーンの甘い匂いを嗅ぐことができるように鼻を描いて、「次はホームランだ」と宣言できるようにひきしまった口を描いて、百六十キロメートルの剛速球が投げられるように僕の二倍もある丸太のような腕を描いて、盗塁王になるためにチーターのようなひきしまった筋肉の足を描いたら、もう、出来上がり。さあ、行こうよ、パパ」
「ユニフォームも描いてあげないと風邪をひいてしまうよ。それに滑り込んだときに、ズボンも履いていないと、体中の皮が擦り剥けてしまうよ。それこそ、病院送りだ」
「パパ、御忠告ありがとう。もう少し、描き足すよ」
　私は、翼の絵が完成するのを待つ間、手持ち無沙汰のまま、二階のベランダに出て外を眺めた。朝晩の空気は冷たいものの、暖かい春の陽射しが、冬の寒さにじっと耐え、手足を伸ばす機会をうかがっているすべての生き物に、「こんにちは」の挨拶をしている。早速、外に出たら、「ありがとう」の返事をしよう。部屋の中でじっとしているのは、とてももったいない。ようやく、翼が人形のユニフォームの最後のボタンを描き終わったところで、翼に声を掛けた。
「よし、できたか。早速、外に出て、キャッチボールだ」
「翼二号は、どうしようか？」
「翼二号？そうだな、パパが仕事でいないときに、一緒に遊べばいいよ。今日は、観客として二階のベランダから応援してもらったらいいだろう。いきなりの参加じゃ、誰だってとまどってしまうよ。それに、一人でも、観客が多いほうがいいだろう？翼の言うとおり、二人だけでも寂しいからね」
　私は、子どもと共に、二階から一階へと階段を降り、玄関前の道路、二人だけの、甲子園球場に見立てたグランドに立った。
「はい、パパ」
　翼が、道具箱からグラブとボールを持ってきた。翼のグラブは、つい最近、誕生祝のプレゼントとして買ったものだ。まだ、ワックスがきいていて、鏡のように輝いている。顔を近づければ、うっすらと目や鼻など顔の一部が写る。革独特の、新品の臭いもする。それに比べて、私のグラブは、表面の茶色がはげ、ひびのような筋が何本も入っている。子どもの頃は、毎日、舐めるように油をつけて磨いていたのだが、大人になってからは、グラブの存在や、キャッチボールをすることさえ忘れていた。職場の野球大会で、ボールを触ることもあるが、それも年に一回だけのおまつり行事。野球が、自分から遠い存在になっていた。テレビで、プロ野球の試合を実況中継しているが、私が仕事から帰ってくるときには、既に、ゲームは終了している。ニュースで、本日の試合の結果が放映されるが、どのチームが勝っても、負けても、どうでもよくなくなってしまった。昨晩、確かにニュースを見たはずなのに、翌日の新聞で、改めてスポーツ欄を見て、初めて、試合結果を知ることもある。目や耳から情報が入ってきても、脳の中に留まることはないのだ。ひょっとしたら、頭の中に鏡があって、興味がない情報は反射しているのかもしれない。野球が、私を忘れたのではなく、私が、野球を忘れたのだ。

　そのうちに、結婚して、子どもが生まれ、やっとキャッチボールをする相手ができた。子どもと一緒にできる遊びは何だろうか？これまでは、本を読んだり、ビデオを観たり、テレビゲームを一緒にしたりしてきたが、やはり、青空の下、太陽の光と熱の二つのエネルギーを全身に受け、風が運んでくる緑の匂いを嗅ぎながら、体を動かすことのほうがいい。頭だけでなく、体が覚えることの方が多いはずだ。脳だけでなく、手や足の動き、体全身の皮膚呼吸、その皮膚の下を流れる血も、生きている証拠なのだ。知識は忘れても、体験に基づいた知恵が、人に生きる力を与えてくれる。
「それ、いくぞ」
　私の掛け声とともに、指先を離れたボールは、ゆるやかな軌道を描いて、空中に弧を描く。風を切って投げ出されたボールというよりも、空を舞うとんぼやちょうちょうが羽を休めるために止まれるほどのスピードだ。ボールは、翼のグラブの中に収まったと思った瞬間、グラブが閉じられる前に弾け、道路の上に落ちた。二、三回、バウンドを繰り返し、最後は、ゴロとなって私の元に戻ってきた。ボールをグラブで挟むタイミングが少し遅れてしまい、うまく掴めなかったようだ。
「ドンマイ、ドンマイ、もう一球、行くぞ」
　私は、今度も、翼のグラブの真ん中目掛けて、ゆっくりと投げる。再び、ボールは、最初のコースと同じ軌跡をたどり、真っ直ぐに進む。ジェット機の空中ショーのように、ボールの後ろから赤や黄の煙が出れば、今投げたボールも、先ほどと全く同じ三次元の世界を移動していることがわかるだろう。ボールが、再び、翼のグラブに素直に吸い込まれる。バシン。ボールを捕球した音。と同時に、ボールは、グラブにお別れの言葉もないまま、地面に向かって「こんにちは」のあいさつをした。その回数は三度を数えた。その度に、ボールは道路の側溝へと転がった。
「パパ、もう、いいよ。僕には、どうしてもボールが掴めないよ」
　成長過程にある小学生には、空間上を動く物体の捕獲は、まだ、難しいようだ。それに、子どもには、自らの手とグラブとの一体感が醸成されていないことも理由の一つだろう。
「グラブがないほうが、掴みやすいよ」
「それなら、グラブをはずして、柔らかいボールで、キャッチボールをしよう」
　私は、家の軒下の遊び道具が一杯詰まった箱を開ける。玉手箱中には、バドミントンのシャトルや羽、サッカーボールにドッチボール、奥の底には、色とりどりのスーパーボールなど、おもちゃのちゃちゃちゃで大賑わいだ。
　その中へ、私と翼のグラブとボールを片付ける。普通の人には聞こえないだろうが、私には幽かに聞こえる。小さなブーイングが、彼らの体を揺らしている。遊び足りないのは、翼ではなく、グラブとボールたちだ。折角、久しぶりに、陽の目を見たはずなのに、もう、お別れか？俺なんか、二十年ぶりに太陽を拝めたぞと私のグラブがわめき散らしている。
　それでも、あなたは、昔、派手に動き回ったのでしょう？私なんか、ようやくお店のショーウィンドウから抜け出せられたと思ったら、今度は、電気もつかない暗闇の箱の中。過去の栄光がない私の方が、不幸ですよ。と言った道具たちの不満の声が聞こえてくる。
　いつまでもグラブ同士の会話につきあうわけにはいかない。「また、今度、必ず、一緒に遊ぼう」と出来るはずのない約束を交わす。

　その一方で、どこかに隠れているはずのゴム製のボールを隈なく捜す。道具たちからは、次は、オレッチだ、それなら、俺も、ぜひとも私を、あたしはどうなるの？ワイもおりまっせ、何を言っているんだ、俺様に決まっているだろうと、次々と大声を発している。自己主張のオンパレードだ。それには応えず、あれでもない、これでもない、それでもないと、道具箱の中を掻き分ける。
　ふと、その時、自分の名前が記されたボールを見つけた。思わず手を伸ばし、握り締める。このボールだ。懐かしさのあまり、もっと強く握り締める。あの頃のことが思い出される。そうだ、私がまだ小学生の頃だ。

　二回裏

「パパ、パパ、何をボーっとしているの。早く、キャッチボールをしようよ。お日様が、今日の最後のお仕事だって、あの山のふもとで、沈むのを待っていてくれているよ」
　息子の声がきっかけで、私の脳の中のタイムマシンは、私を過去から現代へと連れ戻した。
「悪い、悪い」
　私は何事もなかったかのように、懐かしのボールの側に寄り添うゴムボールを掴むと、翼に向かって投げた。
　ボールは、きれいな虹の曲線を描き、翼の小さな手に吸い込まれた。先ほどまでは、何度となく、ボールを弾いていた翼だが、今回は、しっかりと両手で掴むことができた。離れようとするボールの意思に、翼の掴もうとする意欲が勝った瞬間だ。いや、翼の手とボールが和解した瞬間かも知れない。
「パパ、ボールを掴めたよ！」
「ナイスキャッチだ、翼。さあ、今度は、翼の番だ。パパに向かって投げてごらん？」
「いくよ、パパ」
　翼の体は後ろに大きく反り返った。自分の背中の空気、そして、短いながらもこれまでの人生や、長く控えるこれからの未来など、自らが背負っているもの全てを掴むかのように、腕が回された。
　私には、翼の体が何倍にも大きく見え、今から投げ出される翼の全てを受け止めようと強く思った。どんな暴投でも、私の体全体で受け止めてみる。手を伸ばし、足を走らせ、体をジャンプさせてでも。例え、受け止めきれなくても、決して、後ろへ逸らすことはしない。
「さあ来い、翼」
　しかしながら、私の意気込みも虚しく、ボールは、私の頭上千フィートも遠くに感じられるほどの距離を通過した。これが、今、現在の、私と翼の隔たりなのだろうか？これから、何十年間かけて、この溝を埋めていくか、何十本かの橋を架けるか、どちらかだ。親子だからと言って、全てが分かり合えるはずがないのだ。私は、五十メートル先の三叉路まで転がり続けるボールを、ひたすら追った。

三回表・三回裏

三回表

「どうだ、受験勉強の進み具合は？高校の志望校は決まりそうか」

　翼にボールを投げながら尋ねた。

「まあまあだね。取りあえず、順調かな」

　翼から、答えになっていない曖昧な返事とボールを一緒に受け取る。言葉は大暴投だが、ボールは私のグラブにストライク。パシッという心地よい音が鳴る。

「そうか。悪くないのなら、いいことだ」

「父さんこそ、仕事はどうなの？毎日のように夜も遅いし、土・日曜日の休みの日でも仕事場に行っているけど・・・。相変わらず、忙しいみたいだね」

　今度は、私の番だ。翼に負けまいと速球を投げ返す。力が入りすぎたのか、球はややカーブ気味に回転し、翼が構えているグラブと逆方向の右肩辺りに向かった。

　私が仕事場から帰宅したとき、翼は既に自分の部屋で受験勉強に精を出しているため、普段の日は、あまり出会うことはない。仕事が終わった後、会社から自宅までのやや上り坂の道を、自転車で約二十分かけてたどり着く。自宅の玄関のドアを開ける音、そして、外の世界から逃れるように慌てて中に入り、しっかりとドアを閉め、鍵をかける音。今日の疲れを背広と一緒に脱ぎ捨てるため、タンスを開閉する音。何の肩書きもない裸の自分がいることを痛切に感じる。湯船からお湯が溢れ出る音。誰も見ていないテレビから、自分や家族とは一切無関係の事件が垂れ流されるニュースの音。コップにビールを注ぎ、泡が割れるたびに、今日一日が終わったことに対し、後悔の念や安堵感など、錯綜する思いを実感する音。その時、勉強の疲れのためか、「あーああ」という翼の原始的な、言葉にならない音が発せられる。

　私と翼は、音を通じて、お互いの存在を確認しあっている。

「そうだな、まあまあだな」

　これも相手の問いに、正確には答えていない。

「父さんにとっては、忙しいことはいいことなの、それとも悪いこと？」

「難しい質問だな」

　忙しいことは、会社に仕事があることであり、その仕事を任せられている私にとっては、生活の糧を得ることができるし、また、自分が評価されていることに繋がるのだから、ありがたいことである。

　だが、一方で、同じ会社の同僚たちが、定刻時間になると、机の上を片付け、そそくさと職場を離れるのを見ると、何故、自分だけがいつも残って仕事をしなければならないのかと不満を持つこともある。仕事にやりがいを感じる反面、自分から仕事をとった後に、何が残るのか、不安にかられることもある。

「父さんは、今の仕事をするために、受験勉強をして高校や大学に入学したの？」

　先の質問にまだ答えていないのに、もっと返答に窮する根源的な質問が浴びせられた。

　人は、目標や目的がないと自ら進んで行動できないなまけものの動物だと思う。しかし、その行動で到達できるのは、目の前の小さなフラッグを切ることだけだろう。

　例えば、翼が、今直面している高校受験であり、三年後に迎える大学受験である。もっと身近なことであれば、学期毎の中間試験や期末試験であり、毎日の宿題であろう。一つ一つの課題を乗り越え、最終ゴールへと向かう。

　もちろん、高校や大学への入学、企業等への就職が目的ではない。生きるという過程の中で、自分の可能性をいかに実現していくのかが大事なことであろう。次々と現れる目標という名の、山や川、海や大陸を乗り越えながら、自己実現を果たす。

　ただし、その最終目的地がどこなのか、誰も知らない。ゴールに辿り着けるのかどうかもわからない。鎖に繋がれた飼い犬のように、小屋の周りをぐるぐると回り続けているだけなのかもしれない。

「そうだな、そうとも言えるし、そうとも言えないかもしれない。たった一つ言えることは、翼、お前とこうして、キャッチボールをしている時が、一番楽しいということだ。お前が小学生のときは、毎日のようにやったものだなあ」

私は、答えを逃げた。しかし、翼は、私が投げたボールを捕球するため、右足を二、三歩踏み出し、立ち向かう。すばやい動きのせいで、ボールはグラブの先の網の部分になんとかひっかかった。まだまだ、キャッチボールは続けられる。

「ナイス、キャッチ。机の前に噛り付いている割には、体はなまっていないようだな」

私は、子どもの気を引こうと、大声を上げる。

「これぐらいの暴投なら大丈夫だよ、父さん。それより、変化球を投げたの、それとも自然にかかったの？俺のことより、自分のことを心配したほうがいいんじゃない？」

相変わらず、生意気なものの言い方だが、当たっているだけに、辛いものがある。それを見返すため、思い切って投げる。行動こそ真実を示してくれる。ストライクよ、来い。

だが、得てして、現実を変えようとする願いが深ければ深いほど、状況は、反対の方向に突き進む。ボールは、翼の背丈の倍以上の高さの空間を素知らぬ顔で通り過ぎた。

以前、二人でキャッチボールをしていた空き地も、今は四軒の家が建築中だ。私と翼は、二階建ての家を取り囲んでいる足場の下や、木切れやダンボール箱等が申し訳程度に片付けられている廃材置き場、コンクリートの基礎工事付近など、思いつく限りの場所を捜してみたが、ボールはどうしてもみつからなかった。

「残念だけど、今日は、このくらいにしておこうか」

「そうだね、父さん。でも、お陰で、いい気分転換になったよ。この後の勉強がはかどりそうだよ」

「そうか、それならよかった。邪魔じゃなかったら、また、勉強の合間にキャッチボールをやるか」

「いいよ、僕なら。それより、父さんの方が時間の都合がつかないんじゃないの？」

「なあに、お前とキャッチボールをするという目標さえはっきりとしていれば、時間はいくらでもとれるさ。時間はあるものじゃなくて、作るものなんだ」

「二人とも、何しているの？夕食の準備が出来たから、早く、家の中に入ってらっしゃい。お風

呂も沸いているわよ」

　妻の声が玄関先から聞こえてきた。

「父さん、食事だって。母さんが呼んでいるよ」

「そうだな。家に入ろうか。見あたらないボールは、父さんが明日の朝にでも、探しておくよ。だけど、どうしても見つからなければ、新しいのを買わないとな。いつでも、お前とキャッチボールができるように」

「ありがとう。父さん」

　私と等身大の影が、玄関の扉の中に消えた。私も続いて入る。影の大きさが逆転される日は近い。

　三回裏

　一羽のカラスが建設中の家のてっぺんで休んでいる。首をゆっくりと振り、目は自分の頭の後ろの方まで動かし、全方位に気を配りながら餌を探している。

　カラスの動きが止まった。足場の板の上にひっかかっていたボールを見つけたのだ。これは、一体なんなんだ。うまい食い物ではなさそうだが、少し確かめてみるか。カラスは、足場の鉄板の上に飛び降りると、くちばしで、二、三回つついてみる。ボールは、勢いに押されて一回転した。妙に固く、とても食べられそうにはない。それでも、何か役にたたないかなと首をひねって考えてみる。そうだ、子ガラスの遊び相手になりそうだ。こうして、餌を探している間、子ガラスたちは、お腹をすかしてピイピイと泣いている。遊び道具でもあれば、気を紛らわすこともできるだろう。

　そう思うと、カラスは、先ほど突いたくちばしを今度は大きく開けて、目の前の丸い物体を咥えようとした。ボールは、予想以上にはさみにくいし、重い。このままだと高さ三メートル下の地面に落としてしまいそうだ。もう一度、しっかりと咥え直す。これなら大丈夫だろう。さあ、日も暮れてきた。子ガラスたちが待っている巣に帰ろう。両方の翼を広げようとしたが、足場の鉄柱が邪魔で、半分ほどしか伸ばせない。そんな状況の中で、できる限り羽ばたく。やっと足が空中に浮き、尾が上がったものの、ボールは依然として、鉄板の上だ。くちばしが四十五度の傾き

で鉄板に突き刺さっているように見える。

　もっと、勢いよく羽ばたかなければ持ち上がらないぞ。それに、このままでは、自分の体も地面に突き刺さりそうだ。自らを励ますカラス。目の前にある物体が、餌でなくても、一度、子どもたちに持って帰ろうと決めた以上は、なんとかしないと。目の前の目標をクリアすることが、生きていくことに繋がるのだ。さあ、この新築の家と一緒に、ボールを持ち上げる気持ちで更に強く羽ばたく。すばやく上下に動く羽の勢いで、風が巻き起こる。次第に、ボールが浮いてきた。一センチ、五センチ、十センチ、そして、カラスの体は足場を離れ、ボールと共に宙に浮いた。もう、重力なんかに負けないぞ。ここから先の空は、自分たちの世界だ。カラスは、ちじめていた羽をようやく精一杯広げると、空気を叩きながら夕暮れの空に消えて行く。その先にある一番星が、キラキラッと瞬いた。

四回表

翼が社会に出て、早、五年が過ぎた。東京に本社のある企業に就職したため、今は、東京の会社の寮に住んでいる。仕事が忙しいためか、それとも、特段、親に話すことなどないためか、翼の方から私たち夫婦に連絡してくることはまずない。朝早く、また、夜遅くに連絡しても、つかまらない。毎回、留守番電話の機械仕掛けの声が、いないのは当たり前のように返事をする。携帯電話にかけてもいいけれど、仕事専用と聞いているため、遠慮して、連絡することはない。里帰りも、盆、正月の、年二回だけだ。だが、こうした休暇制度のお陰で、子どもたちが帰郷できるのだから、日本の昔ながらの慣習も悪くない。

今年も、盆の休暇で帰ってきた翼を連れ立って、私の父や母、祖先の墓参りに向かう。墓は、山を切り開いた市民墓地にあり、少し高台にあるため、風の通り道になっている。墓に、線香とろうそくを供えようとライターで火をつけようとするが、炎は風に煽られ、垂直から横向きとなる。それでも、線香なら燃えるが、ろうそくになると、一度、火がついても、すぐに消えてしまう。風がやむのを見計らって、急いで、火を灯し、墓の前で手を合わせるが、目を開けたときには、既に、ろうそくの炎は消えている。例え、火が消えても、心の灯火はついたままだと自分に言い聞かせ、墓の前から立ち上がる。私の後に、妻が続く。妻も消えたろうそくに火をつけるものの、線香を立てるときには、既に消えている。

「さあ、翼、お前の番だぞ」

妻が数珠を置き、立ち上がるのを見て、私の後ろに立っている翼を促した。

「ああ、わかったよ」

翼は、立ち上がった妻よりもはるかに大きい。翼が、小学校六年生の頃、妻の背丈と並んだ。高校生になる頃には、私も見上げなければならなくなった。さすがに、今は、成長は止まっているものの、私たち夫婦は老いていくため、身長の差が広がることはあっても、ちじまることはない。息子は、妻から数珠を受け取ると、火の消えたろうそくに再びライターで炎を灯し、取り出した三本の線香に火をつけた。手にした数珠をしっかりと握り、何かしら、長々と祈っている。普段は、手を合わせるやいなや立ち上がるのに、今日は珍しく長い間、墓の前で座っている。風が吹き、木々の青々とした葉が音を立てているため、私には、翼の声がよく聞こえない。

「終わったよ」

翼は、ほこりのついた膝をはたきながら、ゆっくりと立ち上がる。夕日を浴びた影が一段と大きくなり、私の体全体を覆った。三人で、バケツやひしゃくなど、お供えの片づけをすますと、車の止めている駐車場に向かう。

「さあ、帰ろう。帰り道に、夕飯を食べようか？」

私の提案に、妻が「それがいいわ。今日は、久しぶりに、中華はどう？」

妻が推薦した店は、帰宅途中にある小さな中華料理店で、私たち家族にとってお気に入りだ。以前は、人通りの少ない奥まった場所にあったが、最近、道が拡幅され、交通量の多い、幅広い道に面したため、訪れるお客が増えたようだ。特段、そのお店から何かをもらっているわけではないけれど、自分のひいきの店が繁盛することは、なんだかうれしい。私設応援団になった気分だ。大げさに言えば、自分たちの味覚が、世間一般に認められた誇らしい気分なのだろうか。その反面、店があまりにも流行りすぎると、よくあるように料理が手抜きされ、昔の味が損なわれないかと少し心配にもなる。だが、今のところ、そのことは杞憂に終わっている。

「それは、いいな。翼はどうだい？」

「そこでいいよ」

息子は、そんなことはどうでもいい、他に話があるかのように、ぶっきらぼうに返事をする。本当に中華料理でいいのか、他に何か食べたい物があるのか、翼の心を推し測れない。多分、お腹さえ十分に満たされればいいのだろう。

「それじゃあ、みんな、車に乗り込んで。母さんの薦める高級料理店へレッツゴーだ」

私は、少しおどけて二人を促し、車に乗り込もうとしたとき、駐車場の水路に、一個のボールが転がっているのを見つけた。どこかで見たことがある懐かしいボールに思えたが、ボールなんて、皆、同じだ。墓参に来た子どもたちが、暇を持て余し、キャッチボールに興じたまま、持って帰るのを忘れたのだろう。それとも、生前、野球が大好きで、花の代わりに墓に供えてくれと頼んだ故人のボールが、どこからか転がってきたのだろうか。どちらにしろ、このまま放置しておいたら、なくなってしまう。忘れ物として、墓所の管理事務所に届けようと拾おうとしたとき、翼から呼び止められた。

「父さん、キャッチボールをしないかい？」

意外だった。息子からキャッチボールの誘いを受けるなんて。これまでも、小さい頃は、私から声を掛けると、喜んで家の外に出ていたが、中学生や高校生になると、部活や勉強に忙しいため、二人でキャッチボールをする機会は、自然になくなってしまった。たまに、盆、正月ではないけれど、二人の波長が合ったとき、思い出したように、年一回から二回程度するくらいだ。キャッチボールの回数が減るのに比例して、親子の会話も少なくなっていった。

「それは、いいけれど、ここは、市営の墓地だから、キャッチボールをするような広場はないし、グラブだって、持ってきてないぞ」

「実は、ほら、ここにあるんだ」

車のトランクを覗くと、グローブが二つとボールが一個、無造作に積まれていた。私が知らない間に、家の外の道具箱から、持ってきたようだ。

「ほう、どうした風の吹き回しだい。お前から、キャッチボールをしたいだなんて」

「ちょっとね」

翼は、トランクから、グラブを二個取り出すと、私に、白っぽく、艶のないグラブを差し出した。覚えていたのだ、私の愛用のグラブを。そして、あの頃は、太陽光線を反射するぐらい光沢があったのに、今は、私と同じように、古ぼけてしまった自分のグラブを受け取った。そして、グラブを左手につけながら、おもむろに、十歩程度後ろに下がる。駐車場と墓地の間の道路が、

急遽、私たちのグラウンドに早変わりした。
「母さんは、どうする？」
　妻は、ひしゃくとバケツを開けっ放しのトランクに片付けると、バタンと大きく音を立ててドアを閉め、あきれたように
「好きなようにしたら。でも、お墓参りの人に迷惑じゃないの？」と言いながら、それでも二人を見捨てられないのか、監督のようにベンチに座った。
「大丈夫だよ、もうこの時間なら、誰もやって来ないよ」
翼は両肩を前後に回し、既にウォーミングアップに取り掛かっている。
　時刻は夕暮れだが、夏のせいか、屋外はまだ明るい。ナイター前の練習気分だ。もくもくと盛り上がった入道雲が、他の仲間の雲たちと一緒に、観客として私たちを見つめている。おーい、雲たちよ、ビールを片手に観戦するのもいいけれど、あまり飲みすぎると、赤い顔じゃなく黒い顔となって、夕立を降らさないよう、気をつけてくれよ。私は、心から願った。
「それに、二人とも、いつかはプロ野球選手になることを目指していたからな。お互い針の穴を通すコントロールの持ち主だよ。お参りの人に迷惑をかけることなんてないよ。翼、さあ、来い」
「目指すのは、誰にでもできますよ。実際に、プロの選手になれるのは、野球をやっている人の中でも、数千人、数万人のうちの一人でしょう？針の穴どころか、家のブロック塀を大きく通り越して、玄関のガラスを割ったのは、誰だったかしら？うちの玄関が、針の穴の大きさだなんて言わせませんよ」
　妻からの厳しい野次が飛ぶ。
　女という生き物は、他人の失敗をよく覚えているものだ。玄関にボールをぶつけたことなんてすっかり忘れてしまっていた。まして、ガラスを割ったことも。
「男というものは、傷を負って大きくなるものさ。傷負い人だけが、他人に優しくなれる。ほら、母さんも、映画で観ただろう」
「強くなくても、やさしくなくてもいいから、さっさと中華屋さんに行きましょうよ。私は、お腹がすいたわ」
　またしても、現実世界にのみ生きている女の発言だ。このままでは、男たちの夢が、勲章が、女のリアルさの前に砕け散ってしまう。ここは、何としても、食い止めなければならない。
「ベンチは、黙っていて。さあ、翼、母さんに、真の実力を見せてやれ」
「ああ、行くよ、父さん」
　転がっていたボールは、何日間も風雨にさらされたせいか、少し茶色を帯びている。それが返って、土のグラウンドで野球をやっているというリアリティを感じさせてくれる。夢にも、現実感が必要だ。陽炎では、風と共に、妄想がかき消えてしまう。翼の生身のボールが、私に目掛けて飛んできた。本当に、二人でキャッチボールをするのは、何年ぶりだろうか。ボールの汚れは、現実感だけでなく、地層のように月日も物語ってくれる。
「ストライク！さすが、翼」
　息子のボールは、私のグローブのど真ん中に突き刺さる。他に、お墓参りの人がいないせいか

、人目も気にせずに声を上げた。いや、妻に聞こえるようにわざと大きな声を出したのだ。お墓参りが終わったのに、ぐずぐずと、まだ墓所にいる男たちを正当化するためにも、妻に、このキャッチボールがどんなに有意義なものか、認識させなければならない。そのためなら、どんな嘘でも、私はつく。嘘から、夢が生まれ、夢から未来が開かれる。
「なかなかやるじゃないか。会社が休みの日は、野球をやっているのか？」
　私は、ポンポンと、二、三回、ボールをグラブの中へ投げ込んだ。今度は、私の番だ。準備万端だ。
「よし、お返しだ」
　息子に負けたくない一心で、大きなフォームで思い切り投げたものの、力がよけいにはいってしまい、ボールは、アスファルトの道路にワンバウンド、ツーバウンドと跳ねて、翼のグローブに収まった。
「少しだけどね。会社の寮の仲間とチームを作って、遊びだけど、お得意さんたちと草野球をやっているよ」
　翼は、私の暴投も、軽く、グラブを裁いて捕球した。そして、すぐさま、その姿勢から、手首だけを使い、投げ返してきた。ボールは、私のグラブに正確に入った。今の翼なら、私がグラブを閉じていても、手品のように、グラブの中にボールを入れるだろう。ひょっとしたら、守護神の見えないカラスが、プロ野球の選手の夢を捨てきれない翼のため、ボールを咥えて、運んでいるのかもしれない。次に、グラブを開いたら、羽がくっついていないかどうか確認してみよう。
「それは、いいことだ。社会人になると、毎日、家と会社の往復だけで、たまの休みの日も、仕事に疲れたせいか、動くことが面倒くさくなり、一日中、ベッドで寝転がってしまいがちだからな。体を動かすとしても、パソコンを使う際の目と指だけだろう？半径一メートルの範囲内で、世界が動いていると、勘違いをしてしまうぞ」
　私は、次こそ、ストライクを投げようと、さっきよりも、早く、指先からボールを離した。妻も子どもも、自分の思うようにならないのと同じく、ボールも、コントロールがつかないまま、今度は、翼の頭上高く飛んでいく。私には、カラスの応援はないのか。あるのは、妻の皮肉たっぷりの野次だけ。
「しまった」
　ボールの後から、私の落胆の声が、追いかける。例え、声がボールを追い抜いても、ボールのコントロールは制御できない。翼は、私の手からボールが離れた瞬間、ボールの軌道をすぐさま判断し、地面を蹴って、ジャンプした。すばやい判断のせいで、ボールは、翼のグラブの端になんとかひっかかった。
「悪い、悪い、翼。まだ、まだ、肩が十分、できあがっていないからな」
「お父さん、ここは、墓地よ。温もりは、すべて、あの世に連れて行かれているわ。それに、お父さんは、いつも、家族に対して、暴投ばかりじゃないかしら」
　妻からのきつい横槍が入る。その発言こそが、暴投だ。
「大丈夫だよ、父さん。もう、二、三球、投げれば、肩も温まるし、昔のコントロールが戻るよ」

時代は、確実に変わりつつある。昔の指導者は、現実の向こう側に過去の自分の姿を見て、今の指導者の息子は、映画のフィルムを眺めるがごとく全てを受け入れ、私を慰めてくれる。
「父さん。それよりも、話しがあるんだ」
再び、ストレートボールだ。こちらが動かなくても、ボールが私を追ってくる。少し、気合が入っているのか、スピードが先ほどよりも増していた。
「なんだ、おっと、またまた、いい球だな」
私は、息子の話を聞くため、キャッチボールを一旦中断しようと思ったが、思い直して、ボールを投げ返した。
「今度は、どうだ？父さんだって、まだまだ、現役だぞ。それに、話って、何だ？」
ようやく、ボールのコントロールは定まって、翼の持つグラブの真ん中に当たった。自分の体だからといって、自分の思うとおり動くとは限らない。何事にも、謙虚な姿勢で望むことが大切だ。そうすれば、いつかは、報われる。だろう？
「俺、結婚しようと思うんだ」
突然の話に、私は驚き、どう答えたらいいのか迷い、一瞬、グラブを出すのが遅れた。それでも何とかボールを捕球しようと手を伸ばした。だが、ボールはグラブの先端に当たり、勢いを弱めたものの、私の後方にはじき飛んだ。急いで、後ろを振り向く。夕闇は、まだ迫ってきていないものの、全ての景色は灰色に向かって、一緒に手を携えている。その中で、歴史を積み重ねたボールも、道路のアスファルトに同化しつつあった。
「どこへ行ったのかなあ。まさか、かくれんぼじゃないよな」と独り言をつぶやきながら、走ってボールを取りに行く。ボールは、排水溝の穴に止まっていた。
「それは、よかったな。今夜は、祝杯だ」
私は、ボールを握り締めると、翼からやや遠く離れた位置から、今、出せる力の限りで、ボールを投げた。多分、ノーバウンドで届くだろう。いや、絶対に、届いて欲しい。結婚については、もちろん、ＯＫだ。息子が選んだ結婚相手だ。私がとやかく言う理由はない。こういうときには、積極的に賛成の意を表すことが大切だ。ボールは、家族の願いを適える虹になろうと、大きく弧を描き、翼のグラブへと吸い込まれた。それが、承諾の返事だ。
「ありがとう、父さん」
翼からの返答。
「母さんはどう思う？」
翼は、今度、妻に向かって尋ねる。
「どう思うって言われても、急には、返事のしようがないわ。それに、相手のことも知らないし・・・」
やはり女は、現実を生きている。
私は左手からグラブをはずすと、翼に近づいた。
彼から、再び、返球が。
「もうやめるの？それなら、父さん、クールダウンをしないと」
翼が笑った。

　そう、クールダウンだ。息子の突然の結婚話に、心はホットだ。可笑しなことに、本人以外の周りの私が盛り上がっている。少し、落ち着かないと。
「そうだな、クールダウンだな。キャッチボールの基本だし、すべての運動の基本だ。帰ったら、冷たいビールで、体の中から、クールダウンをしよう。久しぶりに、飲み明かすか」
　私は、ほほ笑んだ。
「父さん、帰りに中華店に寄るんじゃなかったの？」
「祝杯は、何度挙げてもいいんだよ」
「お父さん、いくら、うれしくても、飲みすぎはいけませんよ。後片付けも大変なんだから」
　我が家の健康の監督兼コーチの妻が、私たちのホットな思いつきに水を差す。
「大丈夫。ちゃんと、家族全員で乾杯して、後片付けもするよ」
　あっという間に、私と息子は、グラスを鳴り響かせるまでの距離に近づいた。クールダウンは、終わりだ。
「このボール、どうしようか？」
　翼が、最後のキャッチボールの球を私に渡す。
「お前の、結婚の告白を記念して、家に持って帰ろうか？」
「そのボールは、どこかの子どもが忘れたんでしょう？元のところに戻しておいたら。明日にでも、探しに来たときに、なくなっていたら、がっかりするわ。幸せは、みんなで分かち合わないと。私たちは、ボールの所有者にお礼を言わないといけないくらいだわ」
　妻の気持ちが喜びに変化していた。こんなときは、素直に、監督の指示に従わなければならない。
　私は、誰もが目につく水汲み場のベンチの上にボールを置き、三人揃って車に乗り込んだ。
　再び、墓地に風が通る。本当に、お参りの時には、ろうそくに火がつかなくて困る。また、一旦、点いた火も、身内の者が拝んで、墓所から立ち去った後に、既に火が消えてしまっていることが多い。お墓には、まだ、十分燃え尽きていないろうそくが、あちらこちらのろうそく立てに残っている。火がついてすぐに消えたため、新品同様に長く残っているものや、運良く、風に吹き消されなかったため、最後の最後の芯まで燃え尽きたものまで様々である。先ほど、翼が点けたろうそくの炎は、まだ、明かりを灯している。自らを消滅させてまで、周囲を明るく照らすのか、次に備えて、とりあえず、一時だけの明かりを灯し、まるまる一本のろうそくとして原型をとどめるのがいいのか、私には、わからない。それも、運を天に、風に身を任すしかない。最後の結末を見るまでもなく、私は、車の運転席のエンジンキーを回し、アクセルを吹かして、家族と共に墓所から立ち去った。ろうそくよ、さらば。再び、私はここに戻ってくる。いや、来なければならない。いかなる形でか。
　鎮座する山を見上げると、風の波が押し寄せているのか、木々の枝や葉が頂上から山裾に向かって揺れていた。

　四回裏

彼らの家族が墓所から立ち去った後、いつものように風が吹いてきた。寄る辺なくベンチの上に置かれたボールは、風に押され、道路に落ちると、そのままの勢いで道路の側溝を転がる。側溝には、大人の握り拳大の穴が開いていた。コンクリートの蓋が割れていたのだ。ボールは、ホールインワンのように、すっぽりと穴の中に吸い込まれた。空き缶や枯れた葉、お菓子のビニール袋などに遮られながらも、ボールは下へ下へと転がり続ける。そのうち、生暖かい生き物に触れて、勢いを失った。

なんだ、僕のお尻に当たるものは。

穴の中を住処にする子犬は、後ろを振り返る。

お腹が空いたなあ。おにぎりころりんみたいに、何か、食べ物だったらいいんだけれど。でも、ひょっとしたら、あいつだったらいやだなあ。よく、この穴倉の中で出会うんだ、あいつに。この前も、雨降りの中、この住家で休んでいたら、雨水と一緒に、体中、縞模様のあいつが、細長い体をくねらせて、上から流れきたんだ。互いに、目と目が会ったけれど、何をするわけでもなく、あいつは、僕の両足の間をすり抜けていった。僕もあいつが苦手だし、あいつだって、体の大きな僕は怖い存在だろう。それにしても、今、僕のお尻に黙って挨拶をした奴は誰だ。温もりがないところを見ると、石かな。

子犬は、狭い通路の中で、ゆっくりと体を回転させる。

何だ、この丸い物体は。よし、何の返事もないのなら、挨拶がてらに歯で噛んでやる。おや、歯ごたえはいいけれど、硬いので中まで噛めないぞ。丸いから歯がすべって、口で咥えきれない。僕のご自慢の犬歯でも、歯がたたないや。噛み締めるたびに、あごから外れて、下に落ちる。なかなか、正体を現さない奴だが、遊び相手にはちょうどいい。僕一人ではもったいないから、仲間のところに連れて行ってやろう。みんな、面白がって喜ぶぞ。

子犬は、口を大きく開け、再度、ボールを咥えようとした。今度こそ、成功だと思う間も無く、子犬のお腹から、グーグーという空腹の大合唱が起きる。よだれが垂れ、ボールは子犬の口からすべり落ち、更に、下方に転がっていった。

待て、挨拶もないまま、さようならする気か。

子犬の吠える声も無視し、ボールは傾斜に沿って、水路を転がる。慌てて、体全体で振り返り、ボールを追う子犬。

待て、待て。

先を走るボール目掛けて、後ろ足でジャンプし、届いた瞬間、前足で押さえ、口でぐわっと咥える。

「やった」と心の中で叫ぶ。

喜びを口に出そうものなら、水面に写った犬を自分とも知らずに吠え立てて、自分が咥えた骨まで落とした仲間の二の舞だ。悪い歴史は二度と繰り返させない。ここで断ち切ってやる。そのためにも、ここは、グーかパーかわからない手だけれど、小さいガッツポーズで我慢、我慢。胸を張るのは、仲間たちに見せてからだ。

子犬は、もう一度、ボールをがしっと咥え直すと、くるりと巻いた尻尾を左右に振りながら、意気揚々と穴倉を出て、仲間たちのいる公園の住処に向かった。

五回表

バシッという激しい音を立てて、ボールはグラブに入った。今の音は、ボールの音なのか、グラブの音なのか。音は、どこから生まれて、どこへ消えるのか。
「父さん、今度、子どもが生まれるんだ」
翼の力強い声がした。
「そうか、それは、おめでとう。父さんにも、孫ができるのか」
「そうだよ、父さん。父さんは、もうすぐ、じいちゃんだよ」
「じいちゃん？じいちゃんは、やめてくれよ。これでも、父さんは、まだ、若いんだから」
息子の声に反発するように、力を込めて、ボールを投げ返す。だが、ボールは、行き先を告げられていないかのように、息子のはるか左手の方向に飛んでいった。シュートがかかったのだ。何事にも、真っ直ぐなリアクションができないのは、昔からの悪い癖だ。
「ああ、翼。ごめん、ごめん」
ボールを追いかけていく息子の背に、謝りの声を掛ける。やはり、じいちゃんになったのか。目がしょぼしょぼして息子のグラブが見えないのか、肩の筋肉が衰えてコントロールが定まらないのか、それとも、その両方なのか。
はあはあはあはあと数えられないほどの息を切らせて戻ってきた息子が、ボールを投げ返してきた。
「父さんが、じいちゃんになったように、俺も、おじさんになったみたいだなあ。あれぐらい走っただけで、息がもたないよ。心臓が破裂するかと思ったよ。子どもが生まれるというのに、こんなのじゃあいけないな。もっと、体を鍛え直さないと」
息子からの返球は、山なりの超スローボール。じいちゃんとなった俺の体を心配してくれているのか、それとも、ただ単に、自分の体がもたないのか。ボールのギザギザを目ではっきりと確認しながら、グラブを広げた。ボールは、音も立てず、すっぽりとグラブに収まった。昔、おしめを替えたり、高い高いと抱っこをしてあやしたり、熱が出たときには、慌てて車に乗せ、夜間病院に連れて行った、あの翼が、父親になるのか。妙な感慨にふける。
確か、翼が生まれるとき、私は分娩室に入り、出産の立会いをした。医師と助産師二人と妻の四者が、新しい命の創出事業に取り組む中、私、ただ、妻の手を握り、ひーひーふーと声を発しながら、側で励ますのが精一杯であった。何か、取り残されたような気分、だが、なんとしてでも追いつかなければならない気持ち、でも、ただ見守るだけでいいんだという自分への慰めの感情などが、その都度、湧き上がり、交錯する。やがて、子供が、母親から分離。この世で、独立した存在になった翼。ほんぎゃー、ふんぎゃーという泣き声は、相手を威嚇しているのか、それとも、自らを鼓舞しているのか、私にはわからない。まして、本人も、いかなる感情から声を出

しているのかは、知らないだろう。本能のまま、生きるために呼吸し、呼吸をするために、声を出す。それが、泣き声なのだ。決して、悲しいからではない。生まれたことに対する喜びの雄叫びなのだ。

翼の入れ替わりに、私が妻の体内に入ってしまったら、どうなるのだろうか。子どもと入れ違いに、自分が、羊水の中に浸る。ほんの、ささやかな休憩・休息場所を求めての、回帰願望なのか、それとも、七年間は、地中深く眠ってしまいたいという人生からの逃避願望なのか、いやいや、新たな人生への旅立ちをしたいという願いなのだ。

羊水は、用水に繋がる。穢れなき雨粒は、地面を洗い清め、他者の役に立ったという汚れちまった喜びに包まれながら、アスファルトの道から雨水管へと流れ込む。その後、多くの仲間たちと戦友のように肩を組んで列をなし、下水道管に集結する。管の中では、互いに、黒く汚れてしまったことを誇りに思いながらも、このままでは、決して、再び、空高く、舞い上がることはできないことを知る。仲間と共に流れ着いた下水処理場では、あれほど離れたがった人間の汚れや穢れと惜しみながらも訣別し、海へと注がれる。青く澄み切った海は、私の母である。母なる海で、クロールや平泳ぎで仲間と競走するなど遊びに興じ、激しい生の躍動に充実感を覚える。時には、一人で、ぷっかりぷかりと母の体に身を任せながら、ゆったりとした時間を過ごし、生を謳歌する。私は、思いついたように、左右の肩を回し、くるっとひっくり返る。背中を母に委ね、胸を空に向ける。海の青さ以上に、ブルーが強調された空。海が母なら、空は父だ。思ったとおり、父からの声が頭上のはるか彼方から降ってくる。

「息子よ、もう、そろそろいいだろう。遊びの時間は終わった」

その声が聞こえた途端、私の背中は浮き、水玉から、蒸発して気体と化し、超高速度のエレベーターに乗ったかのように、空高く舞い上がる。母との別れを惜しむことなく、新たな冒険に心が躍る。母の必ず帰っておいでの別れの言葉に頷きながらも、心はここにあらずで、体も気持ちも上昇していく。見るもの全てが、一度は経験したはずなのだが、初めてのことのような気がして、心が浮かれる。

ふと気がつくと、水滴の仲間たちと互いに手をつなぎ合い、雲のふんわりとしたベッドでお散歩だ。ジェットコースターほどのスリル感はないものの、新たな仲間たちとの出会いは、新鮮で、刺激的だ。自分以外の他者がいる。それを、この両目、両耳、両手などで感じながら、空での生活を満喫する。そして、束の間の休暇が終わり、仲間たちと一斉に、雨となり、地面へと落ちていく。美しい流線型で、真っ直ぐに地面に向かう雨粒もあれば、風圧を受け、ひしゃげた形で、落ちていくことを妨げられた仲間もいる。ゴールが同じでも、その間に、経験・体験することは、みんな異なっている。真横から突風を受ければ、遥か彼方に吹き飛ばされて、最初の目的地を見失ってしまう。それでも、空気中の汚れや不純物を自らの体に吸収し、全てを浄化するため、ゴールへと突き進む。多くの仲間たちが手を振る最終到着点の前で、私は、ふと気がつく。私たちの目的は、ゴールに到着することではなく、ゴールするまでの多様な、多彩な経験にあることを。私の体がテープを切り、地面と衝突する。大きく跳ねて、ばらばらに砕け散り、下校途中の、小学生の長靴の中に入る。そして・・・。

私の頭の中を、様々な思いが巡りながらも、両眼は、生まれたばかりの翼の顔をじっと見続けた。その時、ほんの一瞬だが、翼の目が開く。生まれたての赤ちゃんが、どこまで外部の世界を認識できるのかは分からないが、彼は、確かに、目を見開いた。そして、目を閉じた。

「父さん、何、ぼーっとしているの？目が開いてないんじゃない？さあ、キャッチボールを続けようよ」
翼の声がきっかけとなり、過去の記憶に埋没していた自分から、キャッチボールをしている現在進行形の自分に、舞い戻った。
「いやー、孫の名前は、何が、いいのか、考えていたところだよ。お前が生まれる時と同じようにな」
私は、自分の世界に浸っていたことを少し照れながら、慌てて別の話題に切り替えた。
「ありがとう。でも、まだ、妊娠三ヶ月目だから、生まれるまでには、時間が十分あるよ。子どもの名前は、妻と二人でゆっくりと考えたいな。それに、男の子か、女の子か、まだ、分からないんだから、名前を決めようがないよ」
ボールは、再び、私のところに返された。
「そりゃ、そうだ。少し、早すぎたかな。ただ、じいちゃんといつ呼ばれてもいいように、今から、気持ちを整理しておかないとな、ハハハハハハ」
無理矢理に搾り出した笑い声は、周囲に拡散していく。だが、万事準備が大切だ。いつ如何なる時にも、何事があってもいいように、万全の態勢を整えておく。それこそが、年の功の所以たるものだ。ほかに何もなくても。そして、ボールを投げ返す。
「じいちゃんと呼ばれる準備を、今からするのはいいけど、あまり、早く、老け込まないでくれよ。困ったときに、子どもの世話を見てもらうつもりでいるんだから。妻の恵も、当分の間は、仕事に専念すると言っているし、保育所に預かってもらっても、幼児はよく熱を出すから、いざというときは、父さんに看病をお願いしたいからね。世話するほうが、介護されていたんじゃ、洒落にならないよ」
息子が、ボールを投げ返してきた。老いては、子に従い、孫の世話をするのか。うれしさとあきらめが交じったつぶやきの声を発しながら、ボールをじっと見つめる。
「まあ、今後のことは、さておいて、まずは祝杯だ。外も暗くなってきたし、家の中に入ろう。母さんと恵さんが、夕食の準備をして、家の中で待っているぞ。今日は、しゃぶしゃぶだ。恵さんには、二人分の精のつくものを摂ってもらわないとな」
「ああ、そうだね。父さんは、うれしいことがあると、いつも、ビールで乾杯だね？」
翼が笑いながら近づいてくる。
「確か、結婚の報告をしたときもそうだったような気がするよ」
「そうかも知れないな。グラスを傾けることで、喜びは膨らみ、広く分かち合うことができ、哀しみは、やわらいで共有することができるんだ。父さんの知識じゃなくて、人類、いや、全ての生き物の叡智なんだ」
「はっ、はっ、はっ。父さん、全ての生き物の叡智だなんて、いやに大きくでたものだね。まあ

、そこが、父さんらしいところかも知れないね。それなら、家で飼っている、家族の一員のカメの亀吉にも、ビールを飲ませてあげないとね」
「亀吉は、今、頭を甲羅干しの石の中に突っ込んで、お休み中だ。もし、目覚めていたとしても、そんなことしたら、亀吉の甲羅が真っ赤になってしまうぞ」
「それ、本当？水槽の中に、ビールを注いだことがあるの？」
「真っ赤な嘘さ」
「なんだ、安心したよ。でも、一瞬、何でもやってみないと納得できない父さんなら、やりそうなことだと思ったけどな」
　私も、息子に、自分がどういう人間か、評価される歳になってしまった。それだけ、息子に分別がついてきたのだろう。それとも、翼が生まれて以来、子どもへの接触の仕方が、全く変わっていない証拠かもしれない。現状を変えるためには、冗談や大ホラでかわすしかない。変化球は、得意中の得意だ。お陰で、ストレートが投げられなくなった。
　私は、手にしたボールを持ったまま、翼にグラブを手渡した。
　翼は、私からグラブとボールを受け取ると、庭に置かれている、サッカーボールやバドミントンのシャトルや羽などを保管している道具箱に、子どもの時と同様に、ざっくりと放り込んだ。グラブは、箱の中に納まったが、ボールは、まだ、キャッチボールを続けたいのか、他の道具に跳ねて外へ飛び出し、車の下に隠れた。
「まあ、いいか。明日、車を動かして、ボールを探すよ。今は、冷蔵庫からビールを見つけ出すのが先決だ」
と、私は、翼に話しかける。
「それなら、僕がグラスの捜索隊員で、父さんがビールの探索隊員だ」
　翼は、私の提案に新たな役割分担案も付け加えて、一緒に玄関に入った。翼の肩は、私の肩の位置よりも、ボール一個分高い。今更ながら、子どもの成長に驚く。私は、また一歩、じいちゃんこと、ジェイジェイに近づいた。

　五回裏

　車の下に転がったボールは、芝生の寝床でぐっすりと眠っていた一匹の雨蛙の上を通過した。
　誰だ、おいらを踏みつけた奴は。まだ、外は薄暗いじゃないか。まだまだ、起きるのには少し早いぞ。もう少し、寝ていたいと思っていたが、体全体を踏みにじられたら、誰だって目が覚めてしまうし、驚いて、目が飛び出してしまう。いやいや、目が出ているのは、生まれつきだって？ほっといてくれ。それよりも、おいらの体を踏みつけにした奴に、文句の一言でも言ってやらないと気がすまない。ほら、見ろ。おいらの背中にギザギザの模様がついてしまったじゃないか。この歳まで、真面目に生きてきたのに、この有様は何だ。仲間たちが水たまりの風呂に入っていても、もう二度と一緒に楽しむことはできなくなってしまった。こんなヤクザな姿をみんなの前にさらすことはできないじゃないか。文句どころか、損害賠償ものだ。訴えてやる。
　あらら、一体どこへ逃げちまったんだ、おいらを轢いた奴は。ひき逃げとは、より一層悪質だ。

許せることも、許せない。生き物なんてみんな、皮膚から始まり、五感を含めて、感覚器官の塊なんだ。一言、悪かったとか、すいませんでしたとか、謝れば、こちらも納得するが、知らぬ存ぜぬでは、怒りが収まらない。よし、おいらを踏みつけにした奴に、物事の道理を叩き込んでやろう。その前に、肝心要の相手を探さないといけない。自分の心の裏側までも見通せる三百六十度回転の自慢の出目を使って、必ず探し出してやるぞ。オイラの背中の通過跡から判断すると、真っ直ぐの方向だな。

おっと、なんだ、あんなところにいやがった。車のタイヤに行く手を塞がれて立ち往生とは情けない。少し、右でも左でも避ければいいのに。猪突猛進とはこのことだ。まさか、今年が、亥の年だから、まねをしているんじゃないだろうな。まあ、とにかく、いくら憎い相手だといっても、身動きできないんじゃ可愛そうだ。ひょっとしたら、頭でも打って、気絶しているのかもしれない。仕方がない。助けてやるか。

雨蛙は、全身の筋肉の収縮と伸長を何回か繰り返し、車の前輪の左タイヤに挟まっているボールにたどり着いた。

「おい、お前、大丈夫か？」

雨蛙は心配そうに、ボールに話しかけるものの、相手からは返事がない。

「やはり、気を失っているのか。まともにタイヤにぶつかったみたいだな」

雨蛙は、吸盤のついた指で、恐る恐るボールを突付いてみる。やはり何の応答もない。

「ひょっとしたら、こいつは、俺たちと同じ生き物じゃあないのかも知れないな」

雨蛙は、今度は、両手で目の前の物体を押して見る。タイヤにひっかかっているせいか、雨蛙が押してもびくともしない。それならばと、やや背を伸ばし、手を上の方に付け、足も球面に乗せ、ボールの頂上に目掛けて登ろうとした。右手、右足、左手、左足と、リズムを取り、交互に手足を使いながら、順調に登っていく雨蛙。上手い具合に、手や足の引っ掛かりがあるため、登りやすい。　もうまもなく、頂点かと思われた瞬間、両手、両足が同時に滑り、そのまま背中から地面に落ちた。白い腹の筋肉がぴくぴくと引き攣っている。

このまま、両手、両足を投げ出し、降参のままじゃあ、雨蛙の名に恥じる。気を取り直して、もう一度挑戦だ。先ほどは、あまりにも慎重になりすぎたため、あと一手、あと一歩が届かなかったと反省。やはり、自分の持ち味は、この引き締まった足の筋肉にある。一挙にジャンプして、頂上制覇を目指すべきだ。

雨蛙は、ボールから少し後ずさりする。飛び上がるためには、しゃがまなければならない。勢いをつけるためには、助走が必要だ。風は吹いていない。後は、自分の気持ちの高ぶりだけだ。よし、エネルギー百二十パーセント充填。ＯＫだ。いざ、いかん！

緑色の強い意志を持つ生き物は、両手を大きく前に出し、すぐさま両足をひっつけ、体をまるめ、続いて、両足で強く大地を蹴る。背筋は伸ばされ、体は空中に弧を描く。車の天井にぶつかりそうな勢いだ。ホップ、ステップ、ジャンプの掛け声で、ボールに目掛けて飛び跳ねる。

ボールの曲線と雨蛙の跳躍の弧が、希望の虹のように重なる。

ベチャ。

雨蛙の四肢は、ボールの八合目に引っ掛かった。頂上は、ほんの目の前。舌を出せば届く距

離だ。蚊やハエが止まっていたら、簡単に舌を伸ばして食べられるだろう。だが、このまま引っ付いたままの状態では、いつかは滑り落ちてしまう。何とか、もう一手、もう一歩踏み出さないと。しかし、ほんの一瞬でも動くと、落ちてしまいそうな気がする。このアンビバレンツな状況。これでは、心が全く身動きできない。だが、いつまでもボールに引っ付いてはいられない。今はとりあえず、腕や腹筋、吸盤など体全体に力が入っているが、一本、また一本と筋肉の筋が離れつつある。もうそれも限界だ。

脳が自覚した瞬間、右足が一歩下がる。それにつられて、左足も一歩後退する。今度は右手が、左手が、球面を掻きむしる。思わず、頬を球面に擦り付けて、少しでも滑るのを防ぐ。おっと、うまく、引っかかったぞ。ささやかな抵抗が功を奏す。だが、それも、ほんの束の間の出来事。球面のギザギザで、体全体の体重を支えることはできない。雨蛙は、背中だけでなく、頬にも堅気でない証拠を刻み、ずる、痛い、ずる、痛いと、音と声を両方立てながら、とうとう草むらに仰向けに倒れた。万歳したままの姿かたちでは、もう、抵抗はできない。白い腹が降参の印を示している。だが、ここであきらめるような雨蛙じゃない。一度ならずとも、二度、三度、勝負に挑まなければならない。負けるな蛙と、遠い過去の俳聖からも、我が一族は声援を受けている。

雨蛙は、この言葉を思い出し、裏返った体を、全身の筋肉を使ってひっくり戻すと、再度、助走をつけるため、後ろに、ボン、ボン、ポンと飛び跳ねて下がる。先ほどと同じ位置だ。このまま、再挑戦しても、同じことの繰り返しでないかという疑念が湧く。それなら、もう一歩下がるべきなのか、それとも、反対に、もう一歩前へ進むべきなのか。再び、思い起こす。さっきは、一手届かなかった。後ろに下がれば、二手届かなくなるおそれがある。それなら、もう一歩前に進むべきか？いやいや、反対に、上にあがらずに、前に突っ込みすぎて、顔面ごとぶつかる可能性もある。やはりここは、前回と同じところから助走だ。意を決する。最後のジャンプの際に、踏み出す角度を一、二度上げてみよう。そして、もっと力強く蹴り上げてみよう。自分の体だけど、自分の思うようにはならないことは、この歳になってよくわかっているつもりだ。それだけに、足の筋肉や指先の骨までに、お願いをする。どうぞ、オイラを目の前の障害物の頂上まで飛び上がらせてくれ。神経の末端までに、願いが届く。熱い血潮が、了解の返事として返ってくる。再び、戦闘状況百二十、いや、十パーセント増しの百三十パーセント、フル回転の準備万端。さあ、行くぞ。ゴー。

目の前の見えないフラッグが振られ、飛び出していくレインフロッグ。さっきよりも、飛び越さなければならない対象物がはっきりと見える。自分の体の三倍はあるぞ。最初の試みのときは、それすらもわからなかった。目が開いていたのに、何も見ていない、見えていなかった。ワン、ツー、スリー、さあ、踏み切りだ。両手を振り、体を引き上げ、収縮していた両足の筋肉のエネルギーをここぞとばかりに解き放つ。ロケットジャンプだ。時間は一瞬のはずなのに、何故か、蛙の目には、自分の動きがスローモーションのようにはっきりと映る。

体は、どんどんと上昇していく。目の前の壁を半分は越えた。もう少しで頂点だ。この勢いだと、てっぺんを通り過ぎて、車の天井にダンクシュートできるぞ。後は、いつ、手を伸ばすかだけだ。最高到達点に上がる前だと、前回のように、あと一手で届かないし、到達点から落ちだしたところで手を伸ばしても、重力に逆らえず、体を持たせることができない。早くもなく、遅く

もない、グッドタイミングを見極めないと。そうだ、今だ。

雨蛙は、指先の吸盤を最大限に開き、体を丸めてボールに飛びついた。ペチャッと吸盤だけでなく、腕や足も曲げ、腹もボールに粘着させた。体中に、縞模様がついても構わない。今は、何を優先させるかだ。見事、頂点に着地成功。十点満点の十二点の出来栄えだ。だが、ここで、気を緩めてはいけない。何事も全て、最後の最後が肝心だ。喜びのあまり、一歩動き出した途端、奈落の底に落ちることもよくある。

仮の征服者は、曲げていた肘や膝をゆっくりと持ち上げて、ボールから滑り落ちないことを確認する。緊張していた顔が緩む。笑顔も百点満点。誰が見ていたわけではないけれど、自分の中から、多くの観客の拍手が沸き起こる。満足、満足。

その時、雨蛙は思った。確かに、オイラは、この球形の物体に飛びついて、頂上を極めることに成功したが、果たしてそれだけでいいのだろうか。オイラの成功は、仲間の成功。仲間の喜びは、オイラの喜び。ぜひとも、この物体を仲間たちに見せてやろう。そして、この物体をオイラたち雨蛙のシンボルにしよう。これまでは、柳の枝が、雨蛙一族の成長の象徴であったが、今は違う。歴史は、常に、更新されるのだ。新しい時代には、新しい酒袋が必要だ。それ、思い立ったら、直ぐに、実行だ。

サーカスの花形役者は、車のタイヤに止まったボールを球転がしの要領で、動かし始めた。おイチ、ニ、おイチ、ニ。リズムをとれば、心も軽い。おっとどっこい、前につんのめって、落ちそうだ。そんな時でも、慌てず騒がず、立ち止まることなく、体を動かす。最後の難所は、駐車場と水路との段差だ。人間にとっては、何の支障もない高さだろうが、オイラたち雨蛙にとっては、身長の高さだ。まして、今は、玉乗りの真っ最中。この状態でうまく乗り切れば、どうぞ皆々様、拍手喝采を！曲芸師「天のカエル」の登場でござい、ござい！

満ちていく月の光が、ボールとおまけのようにくっついている雨蛙を照らす。影は長く伸び、仲間たちが今宵の合唱コンクールに備えて、十匹、百匹と集まりつつある草むらのコンサートホールまで届いた。

六回表・六回裏

六回表

「じいちゃん、キャッチボールをしようよ」
　孫のハヤテの声がした。
　私は、ソファーに寝転がったまま、テレビと新聞の二つの情報装置から、外部の世界とつながっている。だからと言って、特段、テレビで、観たい番組があるわけではなく、電気代の無駄と言われようとも、ただ、スイッチを入れているだけで、イージーリスニング音楽のように、情報が耳を通過する。時に、ニュースの時間、アナウンサーのしゃべり声が、音符として聞こえる時があり、思わず、今の出だしの音は、ドだ、いや、半音高かったとか、それにしても、このアナウンサーは、抑揚がなく一本調子などと、ニュースの内容よりも、しゃべり方、つまり、音やリズムとして捉えている。それも、ほんのひと時の気まぐれで、直ぐに、自分と現実世界を遮断する目の前の左右の紙の壁に目を落とす。
　新聞も読みたい記事があるわけでなく、時には、漢字を飛ばして、ひらがなだけで文章を読んだり、一つの記事の字数を数えたりする。時には、今流行りの、声に出して読むこともある。また、写真付の記事がサラマンダーのように精霊の形に見えた時などは、新しいデザインを発見した喜びで、孫がいるのも忘れて、やったーと叫び声を上げ、必要もないのに、ハサミで切り抜き、そのまま、枯葉のように床に積み重ねていく。だが、それは、人類の叡智への敬意ではなく、自己満足の証なのだ。自分から、テレビと新聞の要塞の中に引き篭もった状態のため、ハヤテの声は聞こえても、姿は見えない。今日は、小学校の授業が終わるのが早かったのか、時計は、まだ、午後一時過ぎだ。
　私は、会社を定年した後、別の関連会社に再雇用されていたが、息子夫婦が共稼ぎとあって、誰かが孫の世話を見る必要が生じた。妻は、まだ、仕事に就いているため、結局、私が孫の世話を見ることになった。その孫も、もう、小学一年生だ。後、何年、孫のめんどうを見なければならないのか。いや、見ることができるのか。頭では、明確に意識していないけれど、孫の成長と自分の老化との闘いが、末端の細胞では、日々、激しい攻防を繰り返している。
「いいとも。玄関前の道路でキャッチボールをやるか。でも、呼び方が違うぞ。じいちゃんじゃないぞ、ジェイジェイだぞ」
　私は、孫が生まれ、世代を超えた血のつながりができたことが、大変嬉しかった。しかし、血縁上は、私が祖父で、ハヤテが孫だが、それをあからさまに表現されることは、少し不愉快だ。じいちゃん、老人会、老いし者。中島みゆきの曲に「年をとることは、素敵なことです」というフレーズがあるが、何が素敵なものか。生まれて、生きて、死んでいく、今、人生の第四カーブを曲がり終え、最終の直線百メートルか、二百メートルかはわからないが、ゴールを目の前に迎

えて、素敵だなんてことは、これっぽっちも思えない。
　素敵という言葉は、他人を踏みつけにし、他人を喰らい、生き延びたこと、つまり人生の勝利者への賛辞なのか。それとも、生きる目標を失った者への慰みの言葉なのか。せめて、老いたことへの最後の抵抗として、孫には、じいちゃんと呼ばせずに、ＪＪ、つまり、ジェイジェイと呼ばせている。ＧＧでもいいが、それでは、ジージーと発音され、じいちゃんと同じように聞こえてしまう。自分が、日本人であること、日本の国で生まれ、育ち、骨になろうとしていることから、ＪＡＰＡＮのＪと、年寄りの冷や水と言われながらも、温泉郷の足湯に浸かって温もり、死ぬまで元気でいようと、夢を追い続けるサッカーのＪリーグの若者にあやかりたい気持ちから、ＪリーグのＪを組み合わせて、ＪＪとした。無理矢理のこじ付けだと思うかもしれないが、理由なんかは、どうでもいい。とにかく、じいちゃんと呼ばれたくないことだけなのだ。
「わかったよ、ジェイじいちゃん」
　屈託のない、ハヤテの返事。わざと、間違えている。私は、執拗に食い下がる。
「ジェイじいちゃんじゃない。ジェイジェイだ」
「わかったよ、ジェイジェイ」
　じいちゃんの私が、大人気なく、呼び方にこだわるのに対し、小学生のハヤテは、大人のやり方で妥協する。目的は、キャッチボールをすること。その目的を達成するためには、枝葉末節の事柄なんてどうでもいい。大木になるためには、枝打ちが必要なことを知っているのだ。これから成長していく七歳の孫と、今後、心と体が収縮傾向し、ねんねになっていく七十歳の私。
　二人は、いつ、入れ替わってしまったのだろうか。そうだ、今年の正月の初詣で、近くの神社の氏神様にお参りした後、次から次へと階段を上ってくる参拝の人を避けるため、神社の階段の端を二人で手をつないで下りようとした。最初は、いち、に、いち、に、と掛け声を上げ、調子よく、二人三脚のように降りていたが、作られた年代が違うのか、石の階段の高さが異なっていたため、リズムを崩し、私の右足は石を踏み外してしまった。私は、滑りながらも、孫を守るため、胸で抱きかかえたが、二人一緒にそのまま下まで転がり落ちた。大丈夫ですか、と声を掛けてくれる参拝の人もいたが、大半の人々は、自分の幸せを祈るために、お参りに来たのであって、他人の不幸にかまっている暇はないという顔をして、何事もないように通り過ぎる。惨劇は、テレビ番組と同じで、全て作り物、やらせ、出来レースなのだと確信している。痛みは、自分には届かないのだから。とにかく、二人は、階段から転げ落ちた。多分、その時から、私と孫のハヤテは、歳の差を越えて、同級生になったのだ。そして、月日が流れ、生物学的に成長したハヤテが上級生、老化した私が下級生になったのだ。
「よし、ハヤテ。表にでろ、勝負だ」
「いいよ、じいじい、じゃなくて、ジェイジェイ」
　ハヤテは、かかとが半分以上折れ曲がり、人生の汚れも穢れも知り、決して真っ白には戻れない運動靴に足を突っ込んで玄関を開けた。
「ハヤテ。キャッチボールをしたことは、あるのか？」
　私は、孫とキャッチボールをするのは、初めてだ。
「パパといつもやっているし、友だちとしたこともあるよ」

息子の翼と、初めてキャッチボールをしたのは、いつのことだったか。
「ジェイジェイ。いくよ」
ハヤテからボールが投げられた。
「おっと、よそ見はいけないな。ボールから目を離すなと、よく言われたものだ」
「ボールに目がひっついたら、キャッチボールができないよ」
ハヤテが、私のひとり言に突っ込んでくる。
「あはははは、例え話だよ。それだけ、ボールに集中しろということだ」
「僕と、ジェイジェイの目がボールに集中したら、ボールは恥ずかしがって、真っ赤になるかもしれないね」
ハヤテにそう言われて、ふと、手にしたボールに目をやる。どこかで見たことがあるボールだ。なんだか懐かしい臭いと汚れだ。握り締めると、昔の感触が伝わってくる。
「ハヤテ。このボールは、どこで見つけてきたんだ」
「家の外に置いてある道具箱の中に入っていたよ。それも、一番底のほうに。パパに野球のボールがないから「買ってよ」と頼んだら、「庭先の道具箱の中に入っているはずだから、よく探してみなさい」って言われたんだ。多分、パパだって、本当に、箱の中にボールがあるかどうかは知らなかったと思うよ。一生懸命探して、見つからなくて、パパにそのことを言ったら、「そうか、なかったのか？前に、あったはずだったんだがなあ」という返事が返ってくるのはわかっていたから、僕は真剣に探したんだ。まずは、一番上に王様のように陣取っているバットやグラブを取り出して、次に、真ん中で、上からの重みと下からの突き上げで少し変形している、中間管理職のサッカーボールやドッジボールを取り除き、その次に、僕もあまり使ったことのないんだけど、いつも虐げられているのか、糸が少しゆるんだバドミントンや先端の羽が折れかけのシャトル、最後に残ったのが、世間から見放されたような、青色の縄跳びの縄と色が剥げ、下地の木が見える独楽と汚れたひものセット。そして、お目当てのボールが、丸い体を四角にして、道具箱の角に押し寄せられていたんだ。どこにも行き場がないから、おしくらまんじゅうをして、孤独な自分を慰めていたのかなあ」
小学生にしては、例えがすごいと思いながらも、昔、翼もそうだったような気がする。
「そうか、道具箱の中か」
私は、もう一度、野球のボールをじっくりと眺めた。あの頃の、あの場所の、あの時の、あのボールにそっくりだと思い出しながらも、ボールなんて全て同じだと思い直し、ハヤテに返球した。
「ストライク！」
ハヤテの甲高い声が返ってくる。子どもの頃の翼にそっくりの声だ。考え方も声も引き継がれている。
「ジェイジェイも、パパと同じで、コントロールがいいね。野球の素質があるよ」
今さら、野球の才能のことで、孫に誉められてもどうなるわけではないが、近所の同年輩のじいちゃんたちに呼びかけて、日本じいちゃん野球連盟、略して、ＪＪリーグを設立するのも一興かもしれない。

「パパは、上手なのか、ハヤテ？」
「うん、パパはうまいよ。野球だけでなく、サッカーや、ドッジボール、バドミントン、卓球なんか、どんなスポーツでも、僕より上手だよ」
「そうか、その上手なパパに野球やサッカー、ドッジボールにバドミントン、卓球を教えたのが、このジェイジェイなんだよ」
　ハヤテからのボールは、力を込めすぎたのか、大きく反れ、私の頭上を通り過ぎようとした。上手なパパを教えた、より上手なジェイジェイを演じるため、私は、思い切りジャンプした。跳び上がった瞬間、背骨からぐきっと音が聞こえた。手を伸ばそうにも、痛くて伸ばせない。体は、くの字のまま折れ曲がり、地面に落下。ボールは、私の頭にさよならを告げ、地球を一周するかのようなスピードで、空の旅へと出かけた。膝を上手く使ったクッションができなかったため、私は、そのままの勢いで地球に激突した。衝撃で、地面に大きなクレーターができれば、温泉を掘ることができるだろう。しかしながら、地球は、私をやさしく受け入れるどころか、反対に、私の体を跳ね飛ばした。一方的に、被害を蒙ったのは、私。膝は、笑うどころか、痛みの泣き声を上げた。そして、崩れ落ち、五体倒地となる。これまでの私に与えられた数々の恩に対し、森羅万象の神々に感謝する機会が与えられたのだ。涙が出るほどありがたい。
「ジェイジェイ、大丈夫？」
　ハヤテが、心配そうに駆け寄ってきた。
「大丈夫、大丈夫」
と、笑いながら答えるものの、何が、大丈夫なものか。今は、先祖帰りではなく、孫と同様、子ども帰り、赤ちゃん帰りになりたい気分だ。このまま、「痛いよ、痛いよ、かあちゃん、痛いよ」と泣き声を上げたい。泣いたところで、痛みが消えるわけではない。泣くことで、自分の感情にどっぷりと浸り、埋没してしまうが、時間が経つうちに、泣いている自分にもう一人の自分が気づき、冷静になれるのだ。
　だが、今は、孫の手前、足を引きずり、腰に手を当てながらも、敢然と立ち上がる。どんなことがあっても、孫の前では、颯爽とした自分を見せたいが、今の自分は、春のそよ風が吹いてきても、倒れてしまいそうだ。もちろん、冷たい北風なら、枯葉同様、ここから姿を消してしまう。風よ、止め！
「ジェイジェイ。キャッチボールはもうやめようか？」
「そうだな。ボールは仲間を見つけに、どこかに遊びに行ったみたいだし、エアキャッチボールでは臨場感がないな」
「何、エアキャッチボールって？」
「目の前にある空気を掴み、丸めてボール状にして、相手に投げるのさ」
「つまり、本物のキャッチボールをしているふりをするんだね」
「ああ、そうだよ。だけど、本物のボールを使わなくても、野球の練習はできるんだ。シャドウピッチングといってね、プロ野球のピッチャーたちは、等身大の鏡の前で、自分の投球フォームを毎日チェックするんだよ」
「ふーん、そうか。鏡が、ジェイジェイの代わりに遊んでくれるんだ。じゃあ、早速、家の中で

、そのシャドウピッチングをやってみるよ。その間、ジェイジェイは、テレビと新聞と遊んでいてもいいよ」
　孫のやさしい言葉に、私は頷く。わずか、数回のキャッチボールだったが、心は十分に通い合った。ただし、この後、私には、病院通いの試練が待っている。
「ありがとう。だけど、逃げていったボールを探さないといけないよ。エアキャッチボールだけでは、飽きてしまうよ」
「それなら大丈夫。僕が探してきてあげる」
と言うなり、ハヤテは、家の裏にしまっている自転車を表に出すと、サドルに跨り、ボールが転がった方向に漕ぎ出した。その自転車は、ハヤテの小学校の入学祝に、私と私の妻が買ってやったものだ。失礼した。私たち夫婦が、全額出したわけでない。ハヤテの両親、つまり、翼夫婦が、ハヤテを連れて、近所の自転車屋さんに選びに行ったものの、両親が買おうとした自転車とハヤテが欲しがった自転車が、金額の面で折り合いがつかず、足りない費用をじいちゃん夫婦、いや、ジェイジェイ夫妻が追い足したのだ。その時、自転車屋の主人に、
「自転車メーカーは、必ず、子ども用自転車に、二種類のランクの製品を設定しているんですよ。一種類が、両親が手を出せる金額の標準タイプで、もう一種類が、軍資金の豊富なパトロンがいる、つまり、孫のためにお金を出したくてたまらない、じいちゃんやばあちゃんが、五段切り替えなどの多彩な機能を持ち、見た目のデザインが優れている高級タイプの自転車です。私ども、商売人にとっては、金額の高い商品が売れるほうが、利益も高くて、ありがたいことですが、自転車職人の立場としては、普通に使うのなら標準タイプの自転車で十分だと思いますよ」
と、気の毒そうな顔をして言った。
　その自転車を走らせ、ハヤテはボールを追う。最初、両手でハンドルを持っていたが、左手をポケットに入れ、余裕の片手運転を見せる。そのうちに、右手も離し、両手を左右に広げて、バランスを取りながら、手離し運転だ。やや、フラフラしているため、いつ倒れないかと心配になり、思わず声を上げる。
「ハヤテ。危ないから、手放し運転は、今直ぐにやめなさい」
　祖父の役目として、注意したものの、自分が子どもの頃、両手放しでどのくらいの自転車を漕ぐことができるのか、悪友たちと競い合ったものだ。言うことと、することが違うと言われればそれまでだが、内心は、怪我をしてもいいから、どんどんと何事にも挑戦してもらいたい。昔、「わんぱくでもいい、たくましく育って欲しい」と、商品とはあまり関係のないセリフを語るコマーシャルがあったが、今の時代には、「腕白」や「たくましい」という言葉は死語であろう。それだけに、ハヤテの、一見、無謀な行動にも、影ながら応援したい。
　私の気持ちが通じたのか、ハヤテは、両手をハンドルに戻したものの、調子が乗ってきたのか、サドルから腰を浮かし、立ち漕ぎの姿勢となる。やや猫背のなで肩の後姿は、父親の、翼と同じだ。そして、祖父の、私とも。
　やがて、小さく見えた姿が、再び、大きくなって、私の元に戻ってきた。
「ジェイジェイ、ボールを探したけれど、見つからなかったよ」
　もう、既に、日は沈み、暗闇が世界の大半を占めている。私としては、ボールを探すことよ

りも、ハヤテが自転車で滑走する姿を見ることの方が重要であった。
「いいよ、いいよ。また、明日、ジェイジェイが探しておくから」
「ほんと、ジェイジェイ。ちゃんと見つけておいてね。僕、今度の休みの日に、パパとキャッチボールをする約束をしているからね。もちろん、ジェイジェイともだよ」
　本音の後に、抜かりなく、私に気を遣った発言だ。いくら、私が大事に育てたところで、父親には適わない。まして、適おうとも思っていない。だが、少しでも、近づきたい気持ちで、ハヤテが自転車を片付ける時間を待ちながら、一緒に、玄関に入った。

　六回裏

　近くの建設現場から、箱バンの軽自動車がライトを照らし走ってきた。急に、キキキキキーと音をたてて、鉄の塊が止まった。年の頃なら、四十前の、作業服を着た男が、ドアから降りてきた。
「ふう、危なかったぞ。もう少しで、タイヤで踏みつけるところだった。道路の真ん中に落ちているのは何んだ。まさか、犬や猫の死体じゃないだろうな」
　男は、ヘッドライトに照らされている物体を確認した。
「これは、野球のボールか」
　男は、安心して、その場を離れ、車に乗り込もうとしたが、思い直して、ボールを拾い上げる。
「野球のボールか。懐かしいな」
　男は、ふと思い出す。小学生の頃は、プロ野球の選手になりたくて、学校の授業が終わると、一目散に家に帰り、ボールとグラブとバットを自転車の前かごに入れ、近所の公園に向かった。友だちと、誰が一番乗りかで競い合い、早く来た順番に、ピッチャーや一番バッターなど、好きなポジションが選べたのだ。中学生のときも野球部だったが、とうとう三年間、レギュラーになれず、高校に進学してからは、野球をやめてしまった。それ以来、ボールを握ることなんかなかった。今から思えば、高校生のときも、あきらめずに野球を続けていればよかったと少し後悔している。そう言えば、来年、小学生になる長男が、野球をしたいと言っていたのを思い出した。自分の苦い経験があったため、あえて、野球に関すること、例えば、キャッチボールやバットの素振りなどは誘っていなかった。むしろ、避けていた。自分の子どもの頃は、スポーツと言えば、野球しかなかったが、今は、サッカーやバスケットボール、バレーボール、卓球など、野球以外にも、様々な種目の球技が盛んに行われ、全国規模の大会がテレビやラジオで頻繁に放映されている。そのせいか、多くの人々がスポーツに関心を持ち、サッカーやバスケットボールなどは、プロ球団が発足し、他の競技も事実上、アマチュアではなく、プロ化している。それだけ、子どもたちにとっては、好きな競技を選択して、自分の可能性にかけるチャンスが増えたわけだ。時代は変わりつつある。それでも、様々なスポーツの中で、息子が野球を選んだのならば、野球をさせてやりたい。まだ、息子は幼いので、時期早々と思っていたが、やりたいときが始まりのときだ。

男は、早速、家に帰って、息子をキャッチボールに誘おうと、車に乗り込もうとした。
「おっと、いけない。このボールは忘れ物だな」
男は、ボールをポンポンと手のひらで回転させる。
明日、きっと誰かが捜しに来るだろう。日に焼けた黒い肌に、真っ白い歯の少年の姿が目に浮かぶ。昔の自分だ。このまま、道の真ん中においていたのでは、どこに転がるかわからない。車に跳ねられでもしたら、裂けてしまうだろう。人目について、かつ、なくならないところはないか。辺りを見回すが、暗くて、適当な場所が見つからない。
おやっ、あそこの電柱はどうだろうか。少し低く、子どもの目線の高さに、ガムテープでひっつければ目立つだろうし、防犯灯が点灯しているので、夜でもわかりやすい。思い立ったら、動け。
男は荷台にある工具箱から、布製のガムテープを取り出すと、およそ十メート先の電信柱に歩み寄り、所有者を待ち焦がれているはずの「希望の星」を貼り付けた。今頃、どこかのだれかが、泣きべそをかきながら、ボールを探しているかもしれない。見つけてくれるかどうかはわからないが、自分が何もしないわけにはいかない。
男は、きびすを返すと、電信柱から離れ、自分の車に向かい、運転席に乗り込む。
さあ、急ごう。妻や息子が私の帰りを待っている。帰宅したら、まずは、ゴムボールを使って、キャッチボールだ。リビングだと、「家の中で、ボール遊びはやめて」と妻にいやがられるから、二階の子ども部屋でこっそりとやろう。俺と息子の、秘密のグラウンドだ。週末は、近くの公園でグラウンドデビューをするぞ。日に焼けた、昔の自分が頷いている。
車は、急発進すると、信号が点滅しだした交差点を猛スピードで駆け抜けた。

七回表

七回表

広い空き地に、僕たちは集まった。そこは、塩田を埋め立てた造成地だが、まだ、建物は、ほとんど立っていない。自宅から、四キロから五キロほど離れているため、みんな、自転車で集合する。自転車の前かごには、愛用のグラブとボールが一個、その他に、麦茶が満タンの水筒が一本。ポケットの中には、小銭が数枚。駄菓子でも、ジュースでも買える金額だ。頭には、好きなプロ野球球団のマークが付いた帽子を被る。タオルはない。汗をかけば、手で拭い、自然に乾くのを待つか、Ｔシャツの裾で拭く。シャツがびしょびしょに濡れている場合、自分の汗で自分の顔を拭うことになる。今、思いかえせば、不衛生だったかもしれないが、当時は、風が吹けば、ひんやりとして、かえって心地よかった。

キキキーという自転車の急ブレーキの音。続いて、キーキーという音が続く。また、また、キーキーキーと軋む音。

「これで、何人集まった？」

学級委員の秋山君が尋ねる。

「ひー、ふ、みー、で、全部で十五人。試合をするには、後、三人足りないな」

体育委員の十河君が答えた。

「誰が、来ていないのかな？」

「さあ、誰だろう？」

「古川君と山田君と大平君だよ」

僕が返答する。

「あの三人、家が近所だから、きっと、一緒に来ているんじゃないかな」

「それじゃあ、三人が来たら、直ぐに試合ができるよう、今から準備をしよう。十河君、みんなに指示を頼むよ」

秋山君の依頼に、十河君が動く。

「よし、わかったよ。みんな、まずはグラウンド作りだ。今、僕がいるところがホームベースだ」

「じゃあ、一塁は、僕が作るよ」

小柄で、足の速い杉本君が、十河君の足元から、バットの柄の部分で線を引き出した。ホームベースから一直線上には、波もない穏やかな海が開けている。その海には、多くの小島が、ヨットのように浮かんで見える。島づたいなら、どこまでも線が引けそうだ。うまくいけば、地球が一周できるかも。

「それなら、三塁は、僕が作るよ」

一番背の高い大山君が、もう一本のバットを持つ。

「よし、大山君にお願いするよ。おっと、杉本君、線がゆがんでいるよ。もう少し、右に引かな

くちゃ」
　川は、必ずしもまっすぐに流れない。線だって、同じだ。
「僕が直すよ」
　僕は、杉本君の引いた線の上から、運動靴のつま先でなぞっていく。ここ何日間、雨が降っていないせいか、埋立地の土は固く引き締まっており、線がはっきりと見えるくらい深く掘ることはできない。それでも、一歩分、前に進んでは、もう一度、後ろに下がり、なぞり返す。何度も何度も繰り返すうちに、線は、次第にくっきりとしてきた。顔から噴き出した汗が、線の上に落ち、より一層、はっきりと浮かび上がる。
「よし、内野の線、外野の線は、全て、ＯＫだ」
　十河君の大きな声が、一塁線のはるか遠く外野まで進んだ僕にも届いた。
「何か、ベースになるものはないかな。誰か、探してくれないか」
　十河君の声に、みんな、四方八方に飛び散る。
「これは、どうだい。重いけれど、何個も落ちているよ」
　藤川君が、ブロックを一つ持ってきた。空き地から百メートルほどの離れたところで、家が新築されており、その家の外構に使うものだろう。
「うーん、目立つから、ベースにはうってつけだけど、もし、ランナーが滑り込んだときに、ぶつかったら痛いよ。それに、ブロックは工事中の材料だろう？落ちているんじゃなくて、置いているんだよ。それを勝手に持ってきたら、工事現場の人に怒られちゃうぞ」
　残念ながら、第一候補は取り下げだ。藤川君は、せっかく重い思いをして持ってきたのに、とぶつぶつ文句を言いながら、ブロックを戻しに行った。
　次に、山下君が、ジュースの空き缶を四個拾ってきた。
「少し小さいけれど、これでは、どうだい」
「うーん」
　十河君が、少し悩んだ末に、
「もし、ランナーが滑り込んだら、ベースが飛んでいってしまうね。そうなると、野球じゃなくて、缶蹴りになってしまうよ。相手チームが、全員、どこかに逃げてしまったら、野球どころじゃなくなってしまうかな」
と、にやっと笑う。いきなりの駄目出しはしない。冗談を交えて、やんわりと断る。彼の得意技だ。
「そうか、缶蹴り野球か、それはそれで面白いんじゃないの」
　山下君が、自分の主張を認めてもらおうと食い下がる。
「山下君の意見は、確かに面白いなあ。野球をやり終わって、時間に余裕があれば、缶蹴り野球をやってもいいんじゃないの。新しい遊びへの挑戦だ」
　クラスの委員長、秋山君の裁定が下る。いつものことながら、秋山君の取りまとめ方には感心する。二人の意見を取り入れ、両者が喧嘩することなく、納得させる、いい判断だ。
　そこで、僕の番だ。
「コンクリートブロックも空き缶も駄目なら、自分たちのグラブをベース代わりに置こうよ。こ

れなら、滑り込んでも安全だし、缶蹴りごっこじゃなくて、グラブ蹴りごっこにはならないだろう？」
　自分ながらいい考えだと思った。秋山君はいかなる裁定をするのか。
「うーん。そうなると、守る側は、自分のグラブをはずせないから、攻撃側のグラブを置くことになるのかな」
「そうだよ。自分のチームのグラブがベースになるから、ヒットを打って、ベースを駆け抜けるときでも、わざとグラブを踏みつけることはしないと思うよ」
　僕は、秋山君の質問に、すかさず、しかも、少し胸を張って答えた。
「ええー。誕生日のお祝いに買ってもらったグラブが踏まれるなんていやだな」
「そうだよ。兄ちゃんのグラブを勝手に持ってきているから、足跡がついたらばれちゃうよ」
「でも、ベースの目印として置くだけだろう？グラブを踏まないように走ればいいんじゃないか」
「そうだよ。勢いよく走っているのに、グラブを踏みつけたら、バランスを崩して転んでしまうよ」
「まあ、他に、ベースの代わりになるものがないのだったら、グラブをベース代わりにするのでいいんじゃない」
「こんなことで、議論しているうちに、日が暮れちゃうし、塾が始まる時間が来てしまうよ。今日は、早く帰らないといけないんだ」
「そうだ、そうだ。さっさと始めようよ」
　メンバーが、口々に、思うまましゃべりだす。野球の応援より、やかましい。
　十河君が秋山君と相談している。そして、秋山裁定が下る。
「よし、やろう。各チームから、四個ずつグラブを出して、攻撃と守備が変わるたびに、交換だ。誰のグラブを出すのかは、各チームにまかせるよ。出来るだけ、同じ人が出し続けないように、くじでもして、順番制にしたらいいよ。みんな、お互い様だからね」
「よし、そうしよう」
　みんなの掛け声が、一致する。
　すると、そこに、まだ来ていなかった古川君と山田君と大平君の三人が、自転車を猛スピードで漕ぎながらやってきた。これで、全員集合。早速、試合開始だ。その前に、チーム分けだ。二人ずつ組となり、じゃんけんのグー、パーを出し合い、二つのチームに分かれた。
「ジャンケン、ホイ。あいこで、ホイ」
　チームが二つできた。それぞれのチームのキャップテンの秋山君と大山君が、じゃんけんで、先攻、後攻を決める。
「よし、先攻だ」
　大山君が、グーの右手を高々と上げる。秋山君は、チョキの手でボールを握る。
　僕も一員である大山君のチームからの攻撃だ。みんな、一斉に、持ち場につく。
「よし、プレイボール」
　三塁の守備についた秋山君の声が、グラウンド全体に高らかに響く。

「一番は、杉本君だぞ。なんとかして、塁に出ろよ」
「まかせてくれ」
　小柄で、足の速い、杉本君が打席に立つ。
　ピッチャーは、肩の強い、大林君だ。学校の体力テストの遠投競技では、もちろんクラス一で、学年全体でも一、二位を争う。当然、投げる球だって速い。それに、彼が投げ込んでくる球は、ただ単に速いだけでなく、打席に立っていると、時々、怖いときがある。スピードガンで測ったわけではないけれど、僕たち小学生レベルでは、プロ野球でいう百六十キロ級のスピードに感じられる。そこでついたニックネームが、「百六十キロの男」。もちろん、体重ではない。
　バシッ。
　一球目が、ミットに投げ込まれた。
「ストライク」
　僕たちのクラスでは、既に半数近くの生徒が眼鏡をかけているが、いまだに、二・０の視力を誇る吉永君が、大きく右手を挙げてコールした。通称「アフリカの目を持つ男」。彼は、こうした審判が必要な際、積極的に主審となってくれるし、みんなも頼みたがる。だから、別称「最高裁判事」とも呼ばれている。通常なら、審判員は、公平を期すため、どちらのチームにも属さないが、今日の人数は、全員で十八人のため、余裕がない。そんなときは、攻撃側が審判を兼ねる。自分のチームが有利になるように、えこひいきをしないかだって？それは、大丈夫。僕らは、みんな、将来、プロ野球選手になることを目指している。大きな志を持っているから、目先の勝利にはこだわっていない。それよりは、今のうちから、正しい審判の下で、ゲームをすることが大切だ。そのため、互いに、大局的見地に立って、審判員として、試合に臨む。時には、判断が誤ることもあるかもしれないが、それは、お互い様だ。僕たちは、自分たちでルールをつくり、そのルールに従って野球をする。小さな民主主義の実行だ。
　続いて、大きく振りかぶった大林君の手から、二球目が繰り出された。
「ストライク、ツー」
「いいぞ、いいぞ、大林君。その調子だ。もう一球で、三球三振だ」
　サードから、秋山君が激を送る。
「いいぞ、いいぞ、大林。いいぞ、いいぞ、大林」
　秋山君の声に合わせて、他のチームメイトからも、リズムに乗った声援が出る。
「タイム」
　バッターの杉本君が打席をはずす。額から目に流れ落ちる汗を、右肩の袖口のシャツで拭う。
「杉本君、ちょっと」
　僕らのチームの監督役の大山君が、草むらのベンチから、杉本君に近づき、右耳に何か囁いている。小さいけれど、何度も頷いている杉本君。
　その後、二度、三度と素振りを繰り返し、バッターボックスに戻る。大山君から秘策が授けられたのか。それにも関わらず、彼は、いつものように飄々としている。
「大林君、油断するな。大山君が杉本君に何か策を授けたぞ」
　すかさず、秋山君が大林君に声を掛ける。さすが、秋山君だ。野球やサッカーなどのスポーツや

、校外学習などの勉強でも、クラスメイトを分け、班編成をした場合、いつも、中心となり、みんなの取りまとめをするのが、秋山君であり、大山君だ。将棋で言えば、互いが、王将だ。片方が会長なら、片方が委員長。片方がリーダーなら、片方がキャップテン。片方が監督なら、片方は指導者だ。クラスの浮沈は、二人にかかっている。好敵手だが、二人の関係は良好だ。互いに認めあい、尊敬しあっているのだろう。僕らは、彼ら二人に全幅の信頼をおいている。
「残念、見抜かれたか。杉本君、サインはさっきも言ったとおり、ホームランの指示だ。一発、思い切り打ってやれ」
　大山君の演技に、両軍から笑い声があがる。そう、僕らの攻撃のサインは、いつも、ホームラン。打てるものなら、ホームラン。どんなことがあっても、ホームラン。もちろん、ボールがバットに当たるのが先決だが。
　大林君は、空の雲に届かんばかりに腕を精一杯伸ばし、大きく振りかぶると、これまでにない豪速球が、空気を切り裂くかのように投げられた。
　杉本君が咄嗟に動く。バットを水平に構えた。バントだ。
「しまった」
　強振すると思って、ややサードベースの後ろに下がっていた秋山君が、ホームベースに向かってダッシュする。
　バットは、見事、大林君のボールを真芯で捕らえた。その瞬間、杉本君はバットを思い切り振り切る。ボールは、前に突っ込んできた秋山君の頭上を越え、レフト前に飛ぶ。レフトを守っていた藤原君が猛然と突っ込んでくるけれど、ボールは目の前でバウンドして転がった。藤原君は、すべりこんで、後ろに抜けないようボールを抑えるのが精一杯だった。
「やった、やった。ヒット、ヒットだ。杉本君、すごいぞ」
　僕たちのベンチは、ホームランを打ったかのように沸き立っている。
　ファーストベース上では、普段、ポーカーフェイスの杉本君が、ベンチに向かって、右ひじを曲げ、ガッツポーズを見せている。大山君は、にっこりと笑顔で応え、頷いている。サードの秋山君は、やられたという顔で、くやしそうに、空にぽっかりと浮かんだ雲を見上げている。ピッチャーの大林君は、気持ちを少しでも落ち着かせようと、レフトから返球されたボールを、グラブの中でポンポンと二度、三度投げつけている。ファーストの高木君が、「ドンマイ、ドンマイ、試合はまだ一回の表、これから、これから」と両手を上げ、内野と外野に向かって呼びかけている。
「さあ、仕切り直しだ」
　大林君が呟く。
　それから、大林君は、本来の調子を取り戻し、二番、三番を三振に仕留めた。そして、四番の大山君を迎える。大山君が打席に立つ前から、互いの目から火花が散る。
　大林君の一球目は、外角の、ちょうど膝あたりの高さ。バットを振っても、ファウルになるコースだ。大山君は、手を出さずにじっと見たが、主審の吉永君は、ストライクのコール。ええっという驚きのベンチの声に、バッターの大山君も、主審の吉永君も、顔色ひとつ変えない。確かに、きわどいコースだが、ストライクはストライクだ。自分のチームがチャンスだからと言って、

有利になるような審判はしない。キャッチャーの後ろに立った瞬間から、そこは、両軍チームから立場を離れた、聖域なのだ。例え、審判のコールに不満があったとしても、僕たちは従う。世の中は、何が一番正しいかわからない。だが、仲間でゲームをやっている以上、誰かが判断をしなければならない。次は、僕の番になるかもしれない。だからと言って、いいかげんな審判をするという意味じゃない。審判員として、役割を担った以上、その職責を全うするだけだ。

さあ、二球目が投げられた。今度は、内角高目のコース。一発当たればホームランだ。思い切り投げたボールと、すばやく振り出されたバット。力と力の真っ向からの勝負。バットはボールに当たったかと思ったが、その瞬間、ボールはホップして、キャッチャーミットに収まった。ボールが伸びている証拠だ。

「ツーストライク」

主審の右手が、再び、上がる。

追い込まれた大山君。だが、彼の顔は笑みを浮かべている。ピッチャーの大林君も同様だ。この勝負、この瞬間を、彼らは心の底から楽しんでいるみたいだ。

バットを握り直し、構える大山君。大きく振りかぶる大林君。

三球目が繰り出された。今度は、まっすぐ、ど真ん中のコースだ。

振り下ろされるバット。タイミングは、ドンピシャだ。まさに、バットがボールを捉え、はじき返そうとした瞬間、ボールは、今度、バットの下をかいくぐり、地面に落ちていった。フォークボールだ。結局、バットはボールに一度も出会うことなく、ホームベース上の空気を二回切り刻むことで終わった。

「ストライク。バッター、アウト」

主審のコールだけが、辺りに響く。

一塁の杉本君は、しばらくの間、立ち尽くしたままだったが、仕方がないとあきらめた顔で、ベンチに戻ってこようとした。僕は、ベンチの側においてあったＳ・Ｓのイニシャル（杉本慎也でＳ・Ｓだ）が印された グラブを掴むと、彼に向かって放り投げる。

「ナイス、バッティング。次も頼むよ」

「ありがとう。これからは、守備に専念だ」

「さあ、今度は、こちらの番だぞ」

秋山君がダッシュで、ベンチに戻る。

「ピンチの後には、チャンスあり。今日は、絶対、勝つぞ」

秋山君を中心に、円陣が組まれ、チームの仲間が一体化する。

相手がその気なら、こちらも負けられない。

「おーい、みんな、集まってくれ」

ピッチャーの大山君が、ピッチャーマウンドに、チームの仲間を呼ぶ。

僕は、セカンドから駆けつける。

「よし、相手チームは、かなり気合が入っているぞ。こちらも、声を出して、頑張ろう」

「おおー」

九人の声が、マウンドを中心として、同心円状に、辺り一面に波打っていく。目の前に広がる、

穏やかな海を航行する船にも、僕らの元気な声が届いているだろうか。澄んだ秋空高く、空港から東京に向けて飛び立つジェット機にも、僕らの生気あふれる声が届いているだろうか。
　僕らのチームのピッチャーは、キャップテンで、四番バッターの大山君だ。まさに、このチームの大黒柱だ。彼は、投手はもちろんのこと、キャッチャーを始め、内野から外野まで、どこでもうまく守れる、オールラウンドプレイヤーだ。しかし、今日の対戦相手のピッチャーが豪腕大林君だから、一点が試合の明暗を分ける投手戦になる。
「大山君、相手ピッチャーは、大林君だから、こちらも、大山君でいこうよ」
　チームメイト全員の合意の元、大山君が、マウンドに立つ。
「よし、それなら、こちらも打倒大山だ。大きくて、険しい山だが、一歩、一歩、確実に登っていけば、必ず、制覇できるよ」
　攻撃側のベンチから、秋山君の檄が聞こえてくる。
　さあ、相手チームの一番バッターは、左バッターの小柄な田中君。僕らのチームの杉本君に負けず、劣らずの俊足だ。当たりそこないの、ボテボテのゴロでも、守備側のダッシュが遅れたら、既に一塁ベースを駆け抜けている。もし、グラブの中で、お手玉でもしようものなら、二塁ベースに達していることもある。もちろん、盗塁だって、お手の物、いや、お足の物だ。とにかく、塁に出すとやっかいな相手だ。
　主審の秋山君のプレイボールの手が上がる。秋山君なら、安心して、審判を任せられる。一回の裏の始まりだ。
　大山君がゆっくりと振りかぶり、第一球目を投げる。
　さっと、バットを水平に身構え、足を踏み出す田中君。
　思ったとおり、一球目から、セフティバントだ。サードの大塚君が、猛前とホームベースに向かう。ボールは三塁線を切れ、相手チームのベンチに転がる。
「ファウル」
　秋山君の大きな声は、グラウンドにいる攻撃側と守備側の全員に伝わる。
　半分以上、一塁線上に走りこんでいた田中君が、打席に戻ってくる。インプレーなら、確実にセーフだった。
「惜しい、惜しい。次こそ、決めてやれ、田中君」
　相手側のベンチから、盛大な応援の声がする。
　セカンドの僕を始め、内野手全員がピッチャーマウンドに集まる。
「大丈夫、大丈夫、ど真ん中に、ボールを投げてやれよ、大山君。どんな難しい打球でも、僕たちが捕球して、アウトにするから。なあ、みんな」
　サードの大塚君が、他の内野手に同意を求める。
「そうだ、そうだ、大山君の快速球なら、相手は当てるだけで精一杯さ。ど真ん中に投げこんで、打てるものなら、打たせてやれよ。田中君のセフティバントだって、へっちゃらさ、なあ、みんな」
　あまり守備のうまくない僕だが、声の大きさなら、仲間の誰にも負けない。まずは、大声を出して、自分を奮い立たせるとともに、周りのみんなを元気付けることが大切だ。そのためにこそ

、僕が内野にいるのだ。守備のキーマンではなくて、元気の源のキーマンなのだ。誰だって、個人個人の役割があり、自分の職責を精一杯果たしている。それが、チームプレイなんだ。チーム競技なんだ。
「そうだ、そうだ、ストライクを投げ込んでやれよ」
「応援、ありがとう。思い切り投げるよ」
　みんな、大山君に思い思いの励ましの声を掛けて、自分の持ち場に戻った。それは、自分自身にも語りかけているのだ。
「さあ、いくぞ」
　大山君の長い指から、白球が放たれた。ボールは、周りの空気を渦に変え、彗星のほうき星のように、目的地へと向かう。キャッチャーの石川君は、ミットを最大限に広げ、ストライクゾーンに構えている。どーんと来いだ。
　バッターの田中君は、もう一度、セフティバントを試みようとバットを水平に出す。だがその瞬間、ボールは、軽くホップし、バットの上をすり抜けた。固まったまま動けなかったバット。と同時に、あまりのボールの勢いに、一瞬、ボールを見失ってしまったキャッチャーミット。バットとミットに別れを告げたボールは、審判員も、バックネット代わりに置いてあった自転車も越え、後ろのアスファルト道路も通り過ぎ、はるか彼方の空き地へと転がっていく。
「早く！早く！」
　秋山君の声に、八十川君と河合君の自転車部隊が動く。いわゆるボールボーイだ。通常のボールボーイなら、ファウルグラウンドに転がったボールを取りに行くのが仕事だが、ここ空き地での仮の野球場は、バックネットがないため、ボールは、一旦は空の果て、そして、バウンドして、地の果てまで向かう。遠くまで転がったボールを急いで拾いに行くためには、自転車が有効だ。走って行ったのでは、時間がかかる。二人は、自陣ベンチの後ろ側に並べていた自分の自転車のペダルに足を掛けると、立ち漕ぎの姿勢で急発進した。大山君の投げたボールは、三つ向こうの先の空き地まで転がっていった。試合当初、白かったボールも、グラウンドの土埃のせいで茶色に汚れ、空き地と同一色化しつつある。早く到着しないと、見失ってしまう。
　キ、キ、キ、キ、キーという軋む音。急ブレーキを掛けるが、ブレーキのゴムがちびているためか、自転車は直ぐに止まらない。二人は、急いで、自転車から飛び降りると、スタンドを立てる暇もなく、ボールがあるはずの空き地に飛び込む。
　ガチャン、ガチャンと自転車と大地が出会う大きな音。その音を無視し、二人はボールを探す。
「どこだ、どこだ」
「自転車に飛び乗ったときに見たところでは、確か、この辺りに転がったはずだけどなあ」
「ないなあ、溝にでも落ち込んだのかな」
「野犬が、食べ物だと思って咥えていったのかもしれないよ」
「この辺り、結構、野犬が多いからなあ」
「でも、野犬が悪いんじゃないよ。子犬を捨てた、人間、大人が悪いのさ。だから、こうして、野犬が増えたんだよ」

「でも、子犬を見ると、人は優しい気持ちになれるのか、残飯などのエサをやりにくる人が多いらしいよ」
「子犬とっては、ありがたいことだけど、犬は、縄張り意識が強くて、エサをくれる人には尻尾を振ってなつくけれど、通りすがりの人には、自分のテリトリーから追い出すため、吠え掛かってくるよ」
「僕も、この間、この付近を自転車で走っていたら、野犬に追い回されたことがあるんだ。ちょうど、自転車のペダル付近に噛み付いてくるんだよ。犬が口を大きく開けたところに、僕の左足があるわけさ」
「ヒエー、危ないなあ。それで、どうなったの」
　二人は、ボールを探すのを忘れて、夢中になって、野犬のことを話している。
「どうしたんだー、ボールが見つからないのかー」
　聞き慣れた声が近づいてくる。
　後ろを振り返ると、キャップテンの秋山君が、彼ら二人の方に向かって走ってきている。その後ろでは、チームメイトが何かしら叫んでいるが、あまりにも遠くに離れたため、何を言っているのかわからない。誰かが、大きく手を右の方向に示している。
「八十川君、もっと右みたいだよ」
「よし、あそこの草むらを探してみよう」
　二人して、膝頭までの高さに伸びた、草むらに分け入る。
　程なく、河合君の声がする。
「あった、こんなところに、隠れていたよ」
　ボールは、黒く薄汚れたお菓子のビニール袋の下にはいりこんでいた。
「見つかってよかった。さあ、ボールを持って、みんなのところへ戻ろう」
「このお菓子の袋、誰かが犬のえさをやった後に捨てたのかな」
「そうかもしれないね。袋は、いろんなところが噛み千切られているよ」
「ボールは、見つかったかい？」
　二人が同時に振り向くと、秋山君は、もう五十メートルほどの距離まで来ていた。
「ああ、見つけたよ」
　河合君が、秋山君に見せるように、ボールを右手で高くかざす。
「それじゃあ、そこからボールを僕に投げてくれ。みんな、急いでいるんだ」
　河合君は、二、三歩走ると、秋山君に目掛けて投げる。
「ナイス、ボール」
　ボールは、ワンバウンド、ツーバウンド、スリーバウンドして、秋山君のグラブに入る。と同時に、秋山君は、すぐさま振り返り、その五十メートル後方にいるキャッチャーの福島君に目掛けて投げる。虹に負けまいと、空に大きく孤を描いたボールは、僕たち少年時代の夢が叶うかのように、キャッチャーのミットの真ん中にすっぽりと納まった。
「ストライク！」

福島君が、体全体で喜びを表現している。
秋山君は、再び、八十川君と河合君の方に振り向くと、
「さあ、行こう、八十川君と河合君。日が暮れて、真っ暗にならないうちに、試合を終えないと。ここは、ナイター設備がないからね。時間切れコールドなんていやだよ」
と、笑みを浮かべて、みんなの元へと走り出す。
取り残された二人は、野犬のことが少し気にかかりながらも、互いの顔を見合わせて頷くと、乗ってきた自転車に跨り、チームメイトの待つ栄光のグラウンドへ向かう。
さあ、試合再開だ。
カウントは、ツーストライク。田中君は、完全に追い込まれた。大山君の腕から三球目が繰り出された。今度も、先程と負けず劣らずの速球だ。田中君は、バットを短く持ち、ひと呼吸早くバットを振る。それでも、ボールの勢いが勝る。なんとか、バットにボールを当てたものの、ボテボテのゴロが、僕のいるセカンド方向に転がる。打球は打ち取った。だが、田中君には足がある。振り抜いたバットを自陣のベンチの方に投げると、ファーストベースへ目掛けて、猛ダッシュ。それを見て、セカンドの僕も、少しでも早くボールを捕ろうと前に突っ込む。このまま、打球を待っていたら、田中君はファーストベースを駆け抜けてしまう。グラブを使わずに、素手でボールを掴む。一塁を振り向くと、田中君はファーストベースにあと数歩のところだ。
「早く、早く」
一塁手の南君が、股関節が裂けんばかりに足を広げ、左手のグローブを目いっぱい突き出している。南君の体を、夕日が照らし、大きな影も一緒にボールを待ち受けている。
僕は、振りかぶる時間も惜しくて、サイドスローで、南君に向かって投げた。まるで、映画のコマ送りのように、僕の投げたボールと田中君の足が、ゴールのファーストベースを目掛けて競争だ。ひとコマ目では、まだ、ボールは、田中君の背中を追っている。ふたコマ目で、激しく手を振る田中君の後ろまで、近づいた。三コマ目で、田中君の体とボールが、一直線上に並ぶ。四コマ目で、ボールは、南君のグラブに入り、田中君の右足のつま先が、ベースを踏んだ。さあ、アウトかセーフか、どちらだ！ベンチに集まっている攻撃側と、グランドに散っている守備側が、一瞬沈黙し、判定を待っている。
「アウトー」
審判の秋山君の右の拳が上がった。
「惜しいなあ、残念！」
一斉に悔しがる攻撃側ベンチ。
「やったー、やったー」
反対に、もうこの試合が勝ったみたいに、飛び上がって喜ぶ僕たち守備側。
一塁手の南君が、僕に近づいてきて、互いの好守備を称え、手のひらで叩き合う。
ピッチャーの大山君も、マウンドから降りてきた。
「ナイス、フィールディング！さすが、鉄壁の二遊間。次も、是非、頼むよ」
大山君の顔に、満面の笑みがこぼれている。
「ＯＫ！ＯＫ！どんどん打たせていこう。どんな打球でも、アウトにしてみせるよ」

互いに、ハイタッチで鼓舞しあう。
さあ、試合続行だ。二番バッターは、中村君。大山君の、速球が冴え、三球三振ではないものの、最後は、外郭低めのボールが決まって、バッターアウトだ。一度も、バットを振ることなく、打席を離れる中村君。バットをかつぎ、うなだれたままベンチに戻る。
すかさず、秋山君の励ましの声。
「ドンマイ、ドンマイ、次は、打てるさ」
顔を上げ、大きく頷く中村君。目が大きく開き、輝きが戻った。
「ツーアウト、ツーアウト。次の打者も三振だ」
守備側は、ひとさし指と中指を立て、互いに確認しあう。
「野球は、ツーアウトからさ。ここで、一本、大きいのを打ってやれ」
「そうだ、そうだ、打ってやれ」
応援だけは負けまいと、攻撃側のベンチからも、連続して声が上がる。
次は、三番の大林君だ。ピッチャーとして調子がいいときは、打者としても、要注意。心してかからないと、大きいのを打たれてしまう。また、バッターとして、活躍されると、ピッチャーとしても、スピードやコントロールが冴え出す。自分のチームの大山君と同様だけど、ピッチャーを調子に乗せると、まずい。ここは、なんとか、大山君に、踏ん張ってもらわないといけない。
打席に立ち、念入りに、バッターボックスの土を慣らし、足元を固める大林君。
ピッチャーマウンドでは、大山君が、ゆっくりと、右肩を回している。
大林君は、肩幅をよりやや広く、両足の位置を決めると、バットを軽く、二、三回振る。邪魔にはならないはずなのに、左肩のＴシャツの袖を軽く引き上げ、万全の構えで、ボールを待つ。いつもながらの彼独特の癖だが、それだからこそ、気をつけなければならない。いつ、投げられても、どんな球でも、打ち返してやろうという気迫が篭っている。
大山君の一投目。やや肩口より高めのコース。大林君は、見送ると思われたが、思い切り振ってきた。かなり、積極的だ。だが、バットは、空を切り、ボールは、キャッチャーの藤井君のミットの中。
審判の手が上がり、「ストライーク」の声が響く。
「ナイスピッチャー、次も、同じ球だ」
「ドンマイ、ドンマイ、自分の好きな球だけを狙っていこう」
二人の対決に対して、両軍からの大合唱。
まさに、大山君と大林君の、一挙手、一投足に、三十二の瞳が釘付けだ。
振りかぶる大山君。構える大林君。
大山君の手からボールが離れる。弾道を見据える三十六の熱い視線。そのうちの二個の瞳が、特に、大きく見開かれた。今度のコースは、外角低めだ。一球目が、高目だっただけに、膝頭辺りの球は、低く感じ、ボールだと判断しがちだが、実際は、ストライクコースだ。高目と低目、内角と外角。巧みにコースを使い分ける大山君には、脱帽だ。もちろん、思ったとおり投げられるコントロールがあってこそだが。
大林君が反応した。ストライクか、ボールか、迷って待つくらいなら、動いてみる。これが、彼

の身上だ。バットが唸る。タイミングは、ジャストだ。いや、やや、到達点には、バットが少し遅れている。
　このままでは、電車に乗り遅れまいとして、一生懸命走ってきたのに、ちょうど目の前でドアが閉まり、電車が汽笛を鳴らし、走り出した時と同じだ。特に、乗客と、目が合った瞬間のバツの悪さは、経験したことがないとわからないだろう。そのためか、電車に乗り遅れた人のほとんどが、ただ黙って俯くか、広告を見るのが目的のように、構内の掲示板に目を遣る。
　話を戻そう。大林君は、さらに、腕を振るスピードを上げる。ボールとバットの衝突だ。力と力の対決。打球は、ボールの勢いに打ち負けたものの、痛烈なライナーで、右方向に切れていく。明らかに、ファールボールだ。ファーストの南君は、それでも、ボールを捕球しようと、小石のばらつくファールグラウンドにダッシュし、体全体を投げ出して飛びつく。
「おおおおおー」
　南君の果敢なプレーに、敵、味方の両方から、驚きと歓声の声が上がる。
　残念ながら、電車には飛び乗れなかったようだ。
　ボールは、道路を越え、隣の空き地へと転がっていく。再び、八十川君と河合君の自転車部隊の登場だ。先程の名誉回復のため、二人は、さっと自転車に飛び乗ると、立ち漕ぎのままボールを追いかける。今回、四つの視線は、確実にボールを捉えている。
　南君は、地面に倒れ込んだものの、すぐに飛び起きると、Ｔシャツやズボンについた土を払う。少し、左ひざを気にしている。そこは、赤く血が少しにじんでいるのがわかった。自分の唾を指に付けると、とりあえず、怪我をした部分に塗りつける。守備が終わり、自分たちの攻撃の番になれば、道路の側溝沿いに生えている蓬を千切って貼り付ければ、野戦病院での治療は完了だ。自分が患者であり、自分が医者である。何から、何まで、全て自分の責任だ。
「ナイス、ファイト」
　ピッチャーの大山君が、八十川君から返球されたボールを頭上にかざす。
　左手のグラブを空に上げ、応える南君。少し足を引きずってはいるものの、チームメイトに心配をかけまいと、ファーストベース上でジャンピングをする。もう、大丈夫だ。
　さあ、ツーストライク。アウトにしろ、ヒットにしろ、最後の一球になるのか、それとも、息詰まる一対一の駆け引きがこのまま続くのか。
　大山君が振りかぶる。それに、呼応して、大林君も大上段にバットを構える。
　さあ、勝負だ。球は、一直線上に矢のごとく、キャッチャーミットへ。今回のコースは、外角高め。釣り玉なのか。それとも、三振を奪いにいく球なのか。大林君が再び、反応したかに見えたが、そのまま、不動のまま立ち尽くす。ボールは、ミットの中へ。さて、審判のコールは？
「ボール。ツーストライク、ワンボール」
　惜しい。ほんの少し、高かったみたいだ。やはり、大林君をひっかける捨て玉だったみたいだ。そのコースに投げる大山君のコントロールもすごいが、身動きせずに見逃した大林君の判断力もすごい。
「ドンマイ、ドンマイ、次で、勝負だ。大山君、こっちに、打たせろよ。どんなボールでも取ってやるよ」

サードの今村君が、グラブを右手で叩いている。
「ファースト方向なら、僕がいるぞ。もう一度、ダイビングキャッチだ」
南君も、今村君に負けまいと声を上げる。
「三遊間なら、僕がいるぞ。どんな打球でも、ＯＫだ」
今度は、ショートの渡辺君だ。
僕も、みんなに負けられない。
「二遊間は、僕がいるよ。もう一度、さっきのプレーを再現してみせるよ」
僕は、両膝を曲げ、腰を落とし、爪先立ちで、前後、左右、どこにボールが飛んできても、すぐに対応できる態勢をとっている。
僕を忘れてもらっては困ると言いたげに、キャッチャーの石川君が、マスクをかぶったまま立ち上がり、右手の二本の指を立てる。そして、大きな岩のごとく、どっしりと座り込む。今の石川君なら、どんなボールを投げても、全て受け止めるだろう。
次は、どんな球種で勝負なのか。セカンドの僕からは、少し見えにくいが、石川君が、キャッチャーミットに隠して、サインを出している。首を横に振る大山君。これならどうだと、再び、サインを示す石川君。今度は、首を大きく縦に振り、頷くピッチャー。次のボールが決まった。一球目が内角高めで、バッターは空振り。二球目は外角低めで、一塁線へのファウルボールとなり、ツーストライク。三球目が外角高めで、バッターは見逃してボール。次の四球目は、どこだろう？僕なら、内角低めで勝負だ。三球目に外角ぎりぎりのコースを突いたので、大林君は、少し、ホームベースに近くにじり寄っている。ただし、バットは長く持ったままだ。内角低めなら、バットは、ボールのスピードに追いつかず、空中で一人ダンスショーだ。大山君、内角低めで三振だ。僕は、心の中で呼びかけた。
さあ、いよいよ大山君が、次の投球動作にかかる。ピッチャーの背中を照らす夕陽は、大山君の影を生み出し、先ほどよりも一段と伸び、ファースト側のベンチにまで届いている。わずか一回の裏表の攻防なのに、なぜか、何時間も経過しているような気がする。僕たち十八人が、同じ時間を共有し、激しい息遣いや、飛び散る汗、収縮しては、伸びきる筋肉、熱く、気迫のこもった声援など、全てが、同じ空間の中で、同時進行で営まれているせいだろうか。まさに、十八人の凝縮した生命が燃焼している。
空間を突き破るかのように、ボールが投げられた。大林君は、瞬時に、左足を開き、バットを短く握り締め直した。そうか、大林君は、最初から、内角の球を狙っていたんだ。引っ張ってくる可能性が高い。
「サード」
僕は、大声を上げると同時に、セカンド方向に走った。ボールは、ミットのど真ん中に向かっている。投げられたボールは、ピッチャーからは、既に手が離れているにも関わらず、大山君の意思どおりにコントロールされているようだ。大林君の「もらった」という顔が、「え、まさか」の驚きの顔に変わる。ボールは変化せず、ど真ん中の、ど真ん中。ピッチャー大山君は、正々堂々と、バッター大林君との勝負にでたのだ。打てるものなら、打ってみろ。大林君は、それでも、すぐさま元の体勢に戻すと、ボール目掛けて、バットを振り下ろす。

「カーン」と澄み切った秋の夕方に響く快音。そして、「ズバッ」という、グラブに命中した音。大林君の打球は、野球のセオリーどおり、ピッチャー返しで、センターまでも抜こうとする勢いだったが、瞬時に差し出された大山君のグラブに吸い込まれた。
「アウト。スリーアウト、チェンジ」
　審判員の声が、空き地全体に響き渡った。
「ナイス、フィールディング、大山君」
　激戦の結果、ピッチャーの全体重がかかり、大きく穴が掘れたマウンド。そのマウンドを両足でならしている大山君のところに、サードの今村君、ショートの渡辺君、ファーストの南君が次々と駆け寄り、賞賛する。
「ありがとう、みんな」
　白い運動靴は、土ぼこりで、真っ黒に汚れている。それでも、マウンドを直し続ける大山君。しばらくすると、相手ピッチャーの大林君が、攻守交替で、マウンドに登ってくる。
「ナイス、ピッチング。まさか、ど真ん中に投げて来るとは、思わなかったよ。完全に、力負けしたよ」
「いや、大林君こそ、いい当りだったよ。咄嗟にグラブを出さなければ、センターに抜けていたし、あの勢いなら、ランニングホームランだったかもしれないよ」
　大山君は、振り返り、遥か向こうの堤防を見る。
「いやいや、完全に、僕のほうがボールの力に押されていたよ。今回は、僕の負けだ。だけど、次こそは、必ず、打って見せるよ」
「そうこなくっちゃ。僕だって、次も、必ず、大林君を打ち取ってみせるよ。あはははは、だけど、なんだか盾と矛の関係みたいだね」
「本当だ、僕は、君の投げるボールを打つし、君は、僕を打ち取る。どちらが、正しいんだろう。とにかく、勝っても、負けても、互いに、全力を尽くすのみだね」
　大山君は、土の付着したボールを自分の服で拭うと、大林君に手渡した。
「ありがとう」
　大林君は、頭を下げて、ボールを受け取った。
　さあ、両チーム、ゼロ対ゼロのまま、二回以降を迎える。果たして、この攻防の結末はどうなるんだろうか。
　既に、七回の表・裏の攻撃が終わった。両チームのエースの力投で、互いにゼロ対ゼロの、均衡状態が続いている。どちらかが勝つまで決着を付けたいが、太陽は、瀬戸内海の小島に隠れてしまった。今日を惜しむように、夕日が辺りを真っ赤に染め、ボールは、星のまたたきほども、見えなくなってきている。両チームの選手たちの影だけが、大きく、隣の空き地にまで映し出されているが、境界が夜の闇にだんだんと溶け込んで、見分けがつかなくなっていく。いつの日か、僕らの中から、本当のプロ野球選手が輩出するだろう。彼は、何万人もの歓声で盛り上がるスタジアムで、まばゆいばかりの照明を浴び、光り輝く本当のスター選手として、空き地の何倍もの広いグランドの中を、縦横無尽に走り回るのだろう。ブロッケンの大男が、僕たちの未来の姿だ。

両チームのキャップテンの秋山君と大山君が、試合を続行するのか、今日はとりあえず引き分けのままで、次の機会に再試合をするのか、会談中だ。
「本当は、決着をつけたいけれど、こんなに暗くなっちゃうと、ボールが見えないよ。今日の試合は、中断にしよう」
秋山君は残念がる。
「そうだね、足元も見えず、暗くなっているから、ボールを追いかけて、石ころや空き缶に躓いたり、工事中にできた穴にでも足を突っ込んだら、大怪我をしてしまうよ」
大山君も、秋山君の意見に賛同する。
「よし、みんなを集めよう」
二人は、それぞれ、自分のチームの選手を呼ぶ。
「今日の試合は、大林君、大山君の両ピッチャー共に絶好調だし、みんなも気合が入っていて、ファインプレーが続出している。最近にない、好試合だから、是非、勝敗を決めたいけれど、こんなに暗くなってしまうと、ボールが見えないし、家の人も心配しているだろうから、残念だけど、引き分けにしよう。また、日を変えて、再試合だ。みんな、いいかい？」
秋山君の説明に、選手全員が頷く。
さあ、お腹もすいたことだし、家に帰ろう。今日の、夕飯は何かな。大好物の、カレーだといいんだけど。僕たち十八人と、三十六個の目玉は、もう既に、家のテーブルの前に釘付けだ。さあ、父さんや母さんの待つ家路へ向かおう。自転車止めをはずす音がガチャガチャ、ガチャガチャと騒がしく鳴っている。
「さよなら」
「バイバイ」
「また、明日」
「それじゃあね」
それぞれが、自分の思いで、言葉を発する。多分、正解なんてないんだろう。そして、自分たちが進む方向だって、みんな違う。
先ほどまで、子どもたちの歓声で満たされていた空き地は、もう、誰の声もしない。海から吹く風が、グランドの土を巻き上げ、少しずつ、少しずつ、子どもたちが一生懸命引いたラインやマウンドの線を消していく。熱戦が繰り広げられていた事実さえも、記憶から消し去られていく。そこに、置き忘れられたボールが一個、マウンドに転がっている。誰が忘れたのだろうか？ボールは、海風に吹かれ、グランドから移動し、草むらを通り過ぎ、段差のあるアスファルトの道路に転がった。そして、数回のバウンドから回転運動を経て、今、動きが止まろうとした瞬間、黒い闇の空間が開き、ボールは、歴史という名の深い穴に吸い込まれていった。もう一度、子どもたちの元気な声が帰ってくるまでの間、眠りにつくために。目ざまし時計はいらない。

七回裏

「父さん、父さん、大丈夫？」
「パパ、パパ。ほら、ジェイ、ジェイが、目を覚ましたよ」
　私は、随分と眠っていたような気がする。ひょっとしたら、このまま、決して目覚めることのない、永遠の眠りにつくことを望んでいたのか。だが、こうして起きてみると、目覚めも、なかなかいい気分だ。新しい朝、新しい自分、新しい時間。全てが、初めての出来事のように新鮮に感じられる。生まれる、生まれ変わるということは、こうした感覚なのだろうか。七十年も立った今、自分が、この世に産み出されたときのことは覚えていない。もちろん、野球を始め、遊ぶことに一生懸命だった小学生のときでも、答が既にわかっているのに、紙に書かれた問題の正解をわざわざ記載することが目標であった中学生のときでも、大学入試に合格することが自分の最大の人生の目的だと思い込んだ高校生のときでも、将来の自分が進むべき道がわからず、目先のバイトに明け暮れ、本質的問題から目をそらし続けた大学生のときでも、就職先が決まらず、留年もやむなしと思いながら、年末の十二月二十五日の朝、サンタクロースでもないのに、赤いオートバイに跨ったに郵便配達人から、会社の合格通知を受け取った大学四年生のときでも、自分が生まれた瞬間のことなんて覚えてやしない。
「おっ、おはよう、今日は、いい天気かい」
「お早うどころか、今は、昼の十二時前だよ、おそようだよ」
　孫の、ハヤテが突っ込んでくる。
「そうか、おそようか、それはいい。はははははは」
　間近に見える天井、いつもより低い枕、弾力性が異なるベッド、消毒された臭いのする部屋などから総合判断すると、私は病院のベッドの上に横たわっているのだ。首を横に向け、窓の外に目を遣る。明るい陽射しが、部屋に差し込んでいる。小鳥を始め、草や木、虫たちなど、地球上の生き物たちすべてが、太陽の光の下で、自分の役割を果たしているのに、私だけがベッドの上で取り残されている。
「先生、どうなんでしょうか？」
　息子の翼が、傍らに立っている医師に尋ねた。
「検査結果がまだ出ていませんので、正確な診断はできませんが、患者さんの元気そうな顔色を見ている限りでは、今すぐに、どうということはないでしょう」
「そうですか、ありがとうございます」
　軽くひと息呼吸をした後、安心したように、医師に頭を下げる息子。
「とりあえず、父さんが、目覚めてくれたので、安心したよ。パパは、着替えなどの荷物を取りに家に帰ってくるから、その間、ハヤテは、ジェイジェイの様子を診ていてくれるかな。昨晩のように、ジェイジェイの様子が急に変わったら、ベッドの上のナースコールボタンを押すか、詰所にいる看護師さんを呼びに行きなさい。それと、パパの携帯電話にも連絡してくれ」
「うん、いいよ。僕、ジェイジェイと一緒にいるよ」
　私は、ようやく、自分が置かれている状況が飲み込めてきた。昨晩、私の身に、何か異変があっ

たのだが、全く覚えていない。周りの様子から推察すると、命が危なかったのかもしれない。そんなこともつゆ知らず、本人は、夢を見ていたのだから恐れ入る。危篤状態に陥りながらも、確か、夢の内容は、私が小学生で、友人たちと草野球をしている様子だったはずだ。今から、六十年近くも前のことだ。だが、今でも、鮮明に、ボールの一球、一球や友だちの走る姿を思い出す。それに比べ、最近、物覚えが悪くなったのか、それとも、物を覚えることを拒絶しているのか、ついさっき出会い、あいさつを交わした近所の人の名も、昨晩食べた夕食が、大好物のカレーライスだったのか、それに負けまいと好きなクリームシチューだったのか、ＤＨＯの豊富な鯖の煮付けだったのか、いやいや、昨晩は、久しぶりに、退職した会社時代の友人との飲み会だったのか、過去が自分の記憶の中で、時間軸を通り過ぎ、願望と相まって、脳の中で右往左往している。全く不思議だ。反面、過去の順番なんて、私にとって、もうどうでもいいことなのかもしれないと自己正当化したい気持ちにもなる。それとも、私の脳だけが特別なのだろうか。

「ジェイジェイ、まだ気分が悪いの？」

　私よりも一回りも小さい顔のハヤテが、心配そうに私の顔を覗き込んでくる。

「ああ、そんなことないよ。元気もりもり、この通りだよ」

　無理やりに、パジャマの腕の部分をめくり、腕を曲げ、やせ細った筋肉を見せる。確実に、肉体は、加速度を増して、老化へと突き進んでいる。

「それなら、よかった」

　そう言うなり、ハヤテはベッドの側の椅子に座ったまま、マンガの月刊誌のページを開き始めた。耳には、ウォークマンのイヤホンをつけて、音楽を聴いている。どこまで、私のことを心配してくれているのかわからないが、その姿にほほえましさを感じる。普段と変わらない一日。そう、私が倒れたことも、病院に入院したことも、ハヤテが付き添いで看病していることも、マンガの本を読んでいることも、全て、日常の生活の一コマなのだ。時に、楽しいことや悲しいことなど、様々な感情を触発させるスパイシーな出来事が起こるだけだ。人は、それでも生きていく。そして、寿命を全うする。生きているその瞬間まで。生と死は、隣り合わせであり、二人三脚のように、日々、「おはようございます」や「こんにちは」、「おやすみなさい」と言葉を交わしながら、互いに意識し合うことで、存在を確認しあっているのだ。

「そのマンガは、面白いかい？」

「面白いよ」

　顔は上げずに、口だけで答えるハヤテ。

「それは、いいことだ。楽しいことが、一番だ」

「ジェイジェイも、読むんだったら、先月号があるよ。貸してあげようか？」

「ありがとう。また、今度にするよ」

　私が、家で倒れ、ここに運ばれて、何時間が経つのだろうか。零れている昨日の夕方の記憶を拾い出し、集めた。そうだ、庭木に水を遣ろうとして、玄関口に立ったときに、急に目の前が真っ暗となり、そのまま崩れ落ちてしまったのだ。ベッドの傍らに置いてある小さな目覚まし時計を手にする。長針が六を指し、短針が一と二の間だ。倒れたのが、午後五時頃だから、二十時間近くも眠っていたことになる。あまりにも、眠り過ぎたのか、背中が痛い。少し、横に向く。この

まま、目を覚まさずに眠り続けたら、痛みも感じないのだろうか。それとも、逆に、痛みで目が覚めるのだろうか。私の人生を支配する目覚まし時計があって、時間ですよとブザーを鳴らしてくれるのだろうか。ふと、ハヤテの座っている椅子の下を見ると、ボールが一個転がっている。病室に、ボールなんて、変な組み合わせだと思いながら、ハヤテが持ってきたのか、もしくは、私の前の入院患者が、まだ、子どもで、入院生活中、退屈しのぎに、病室でボール遊びをしていたのかもしれない。
「ハヤテ、椅子に下に、ボールがあるぞ」
「うううん」
　マンガに熱中して、上の空の返事だ。ひと腕も、一歩も動こうとしない。ただ、活躍するのは、漫画のページをめくる指だけ。
「そのボール、ハヤテが持ってきたのか？」
「どのボール？」
　本のページをめくる手とまばたきひとつしない見開いた目。
「ほら、ハヤテの椅子の下に、転がっているボールだよ」
「え、ホント！」
　ようやく本から目を離すと、体を折り曲げ、足元を見る。
「ホントだ、ボールがある！」
　ハヤテは、自分の手のひらよりも大きいボールを、両手で拾い上げた。
「その、ボール、ハヤテが家から持ってきたのか？」
　再度、確認する。今度の言葉は、耳に届くだろう。
「違うよ、僕が持ってきたのは、このマンガの本だけさ」
「その本、一冊だけ？」
　私は、ハヤテが座っている椅子の後ろのサブザックに目をやる。何が入っているのか知らないが、荷物が一杯で、チャックの蓋が途中までしか閉まらず、半分以上が開いたままだ。片付けられたいよりも、飛び出したいおもちゃの気持ちが表れている。
「うん、このドッチボーラーが主役の漫画は一冊だけだよ。その他に、カードゲームで対戦するマンガと、少年忍者が活躍するマンガと、海賊が七つの海を駆け巡るマンガと、ロボットが人間のように意思を持つマンガと・・・、それに、カードが数十枚と、コンピューターゲーム機が一台、ソフトが二個」
「ハヤテは、一体、何冊の本を持ってきたんだい？」
「うーん、わかんない」
「その青色のバッグに、いつも入れて、持ち運んでいるのかい？」
「うん、そうだよ」
「つまり、ハヤテの全財産が詰め込まれた宝石袋というわけだな」
「そうだね・・・半分当たっているけど、半分はずれているよ。僕の部屋には、もっとたくさんのマンガの本と、数百枚のカードと、壊れたロボットのおもちゃが数十台もあるよ」
「それじゃあ、火事や地震などの、いざというときは、ハヤテの部屋ごと、そのバッグに詰め込

まないといけないね」
「そんなことできるの？そうか、どんなものでも入る、ドラえもんバッグがあればいいんだ」
「どんなものでも入るバッグか、それはいいね。それが手に入ったら、遊びに行くときは、そのバッグの中に、ジェイジェイも一緒に入れて欲しいね」
「いいよ、ジェイジェイも、仲間に入れてあげるよ。でも、できるだけ、小さくなってね。ジェイジェイの頭だけが、バッグから飛び出していたら、変だから」
「はははははは、それは、愉快だね。ハヤテの頭の後ろに、一回り以上大きなジェイジェイの顔があったら、さぞ、ハヤテの友だちは、びっくりするだろうね」
　頭の中で、想像してみると、実に、楽しい。これは、私の願望なのか？ハヤテの読んでいるマンガの世界なら実現可能だ。それなら、私もハヤテと一緒に、マンガの世界にワープだ。
「それより、ジェイジェイ、今は、気分がいい？」
「そうだな、いいというほどではないけれど、悪くはない。悪くはないということは、いいということだろう」
　実際、今の健康状態がどうなのかは、自分でもよくわからない。頭や、手、足、目、鼻、口など、私の一部は、正常に動いている。呼吸もできる。心臓も脈を打っている。おっと、お腹が鳴ったぞ。まだまだ、背中とお腹のランデブーには程遠いが、胃や腸などの食道器官は、動くのを待ちかねている。今すぐ、何かプレゼントを、喉越しに贈ってあげないと。
「ただ、お腹が少し、いや、かなり減ったみたいだ」
　ベッドの周りを見回しても、さっきのボール以外に、口に咥える物はない。例え、ボールを咥えても、じいちゃんのおしゃぶりでは情けない。
「じゃあ、僕のお菓子を分けてあげるよ」
　ハヤテは、すぐさま、バッグの中に手を突っ込み、洗濯機の回転板のように、中をかき混ぜながら、お菓子袋を取り出した。
「はい、これあげるよ。昨日買ったばかりだから、賞味期限は大丈夫だと思うよ。その代わり、お菓子を食べた後、僕と遊んでよ、ジェイジェイ。僕、とても暇なんだ。マンガの本を読むのも、少し厭きてきたし・・・」
「いいよ」
　私は、すぐに頷いた。いい答えにしろ、悪い答えにしろ、返事は早くしたほうがいい。相手が、子どもだと思って、おろそかにしてはいけない。
　ハヤテからスナック菓子を受け取り、ビニールの袋を横に開ける。縦に開封するとお菓子を床にばらまいてしまう。そのスナック菓子は、昔から売られているえびせんべいだ。形は、体操の月面宙返りほどではないけれど、何故だか、少しひねられている。主に塩味だがで、よく噛み締めると、ほんのりとえびの香と甘みが感じられる。他の駄菓子に比べて、味も少しひねられているのが、好評の理由だろう。私が子どもの頃、新製品として発売され、もう既に、五十年以上経っている。それ以来、わさび味やカレー味など、多彩な種類が発売されているが、私は、子供の頃の体験が脳に刷り込まれているのか、スーパーマーケットのお菓子売り場に向かうと、私の手はいつもこの商品を選んでしまう。特段、このお菓子と共に人生を歩んできたわけではないけれど

、何故か親しみを感じ、このスナック菓子を食べるたびに、心から喜びが込み上げてくる。えびせんべいを一本口の中に放り込むと、私の目の前に、ひとつの情景が浮かび上がってくる。そう、父親とのキャッチボールの風景だ。バリバリ、もぐもぐと、口の中で音がしている間、私は、ボールを握り締め、父のグラブ目掛けて投げ込もうとしている。音が鳴り止む。景色が消えた。慌てて、えびせんべいをもう一本、口の中に放り込む。カリカリ、ごっくん。歯とえびせんべいの音の競演が始まると、先ほどの映像が、引き続いて流れ出す。ボールは、私の手から放たれると、父の顔に向かって真っすぐに飛んでいっている。このままでは、父の顔にぶつかってしまう。だが、心配はそこまで。父は、何事でもないように、片手のグラブだけでボールを軽くさばいた。父は、普段、私に、ボールは両手で捕球しなさいと口やかましく言っているのに、自分の場合は別だ。だが、簡単にボールを捕球する父の姿を見ると、私は、子どもながらかっこいいと思い、いつか自分も真似してみたいと憧れたものだ。父が何か叫んでいる。今の私には、何を言っているのか聞きとりにくい。父の声がどんどん小さくなっていく。おっと、口の中の、えびせんべいが少なくなってきているぞ。慌てて、右手に掴みきれないほどのえびせんべいをほおばる。ガシャ、ギシャ、グシャ、ゲシャ、ゴシャ、ペロリン。これでは、お菓子を食べているというより、工場でえびせんべいを破砕しているようだ。

「ナイスボール。今度は、父さんの番だ」

　お菓子を粉砕中の音の隙間から、再び、父の声が聞こえてきた。父が、右足を一歩前に出し、両手を家の二階の屋根に届かんばかりに伸ばし、体全体を使った投球フォームに入る。左ひざを上げ、体を右半身に向け、左足を大きく前方に踏み出す。ひねられた体から、わずかに遅れて、しなった右腕が振り下ろされる。最後、右手首のスナップがきかされた。ボールは、私の胸目掛けて、真正面に飛んでくる。父のいる前で、父の真似をしてみよう。ふと、そんな考えが頭をよぎる。おっと、父の姿が、夕闇の中に溶け込むように、輪郭が薄れていく。父が何か叫んでいる。私の耳に聞こえない。もっと、お菓子を！急いで、えびせんべいの袋に手を突っ込む。あれ、ないぞ。ぐるぐるっ、ぐるぐるっと掻き回す。手には、かくし味の岩塩が付着するものの、残骸のひとかけらも残っていない。

　ハヤテを見る。にこっにこっと笑った顔に、最後のえびせんべいが放り込まれた。ガリガリッ、ガリガリッ。私は、子供から、孫のいるじいちゃん、いや、ジェイジェイに戻った。

　ハヤテの顔をもう一度見つめる。たかが、お菓子で、自分の人生を振り返ることができるなんて、安いものだし、ありがたいことだ。このお菓子が、私のタイムマシンになれるのか。そして、今、生きている、私の同胞たちの、思い出の宝箱になるのか。人生は、ほんの小さなきっかけで、そう、この指先ほどの、スナック菓子が、私の、私たちの、人生の充実度を確認してくれる。何だか、嬉しくなってきた。この先、まだ、何年間かは生きられる。

「どうしたの、ジェイジェイ。一人で、何を笑っているの？」

「いやいや、このお菓子が懐かしくてね」

「そう、僕もこのスナック菓子は、大好物なんだ。昨日も食べたけど、今も目にすると、ものすごく、懐かしいよ」

「あっはっはははは、そうか、それじゃあ、今日も二人で、昨日を懐かしがって食べたいけ

れど、もう、お菓子は残っていないぞ」
「大丈夫だよ。実は、こんなときのために、もう一袋、準備しているんだ。ジェイジェイが眠っている間に、パパと一緒にコンビニに行って、レジでお金を支払うときに、パパの目を盗んで、カゴの中に放り込んだんだ。ほら、ここにあるよ」
　マンガのコミックやゲームカードで溢れ返るサブザックの中に手を突っ込むと、難なく、えびせんべいの袋を取り出した。ハヤテの手には、目がついているのか？
「はい、ジェイジェイ」
　渡された袋を開き、ハヤテの手のひらにお菓子をのせ、自分の口の中にも放り込む。
「おいしいかい？」
「おいしいよ」
「ジェイジェイもおいしいよ。二人で食べると、一層、おいしさが増すみたいだなあ」
「それより、ジェイジェイ。このお菓子を食べ終わったら、さっきの約束を守ってよ」
「さっきの約束？」
　ハヤテは、手のひらに盛ったお菓子を、口の中に一度に投げ込むと、もぐもぐさせながら話し出す。
「このほうほるで、きいやっちほうるをひようよ」
「はははははっ、ゆっくり食べてから話しなさい。転がっていたボールで、キャッチボールをするんだな。わかったよ、わかった。必ず、キャッチボールはするよ。それよりも、今は、えびせんべいをゆっくりと噛み締めて食べなさい。大丈夫、それまで、ジェイジェイは、どこにも行かずに、ここにいるから」
　お菓子に夢中になっている、目の前のヘンゼルならぬ、エンゼルは、手のひらいっぱいのえびせんべいを食べつくすと、今度は、
「ジェイジェイ、お茶か、ジュースか、何か飲み物をちょうだいよ。お菓子を食べすぎて、喉が渇いたよ」
「ああ、いいよ。そこの冷蔵庫に、お茶のペットボトルが、はいっていないかい？」
「ちょっと開けてみるよ」
　お菓子の次は、飲み物と相場が決まっている。ハヤテは、部屋の隅の病室に備え付けの小さな冷蔵庫のドアを開ける。
「ジェイジェイ、何も入っていないよ」
「そうか、何もはいっていないのか」
　これから、ひとつずつ知識や、思い出を、まだ隙間の多い宝箱に詰め込んでいくハヤテ。そして、反対に、全うすべき寿命に向かって、ひとつずつろうそくを消していく私。後、何本のろうそくが残っているのだろうか。そのろうそくも風が強ければ、灯が消えてしまう。
「それじゃあ、自動販売機で買ってこないといけないな」
「僕、お金を持ってきていないんだ。ジェイジェイはある？」
「そうか、お金か・・・」
　昨晩、自宅で倒れて、病院に運ばれてきたため、財布は持ってきていないはずだ。だが待てよ

。庭で水遣りをする前に、近くのコンビにで、たばこを買いに行ったはずだ。もし、倒れたままの服で運ばれたのなら、その時のおつりが、ズボンのポケットに入っているはずだ。
「ハヤテ、そのロッカーに、ジェイジェイの服が入っていないかい？」
　翼が、さっと動き、ロッカーの扉を開ける。早くも、お金の臭いを嗅ぎつけたのだ。
「あったよ。戸棚の中に、ジェイジェイの服が架かっているよ」
「そうか、それじゃあ、青色のズボンがあるだろう？そのズボンのポケットの中を探ってごらん」
「ちょっと待ってね」
　ハヤテは、吊るされたズボンのポケットの中に手を突っ込み、五本の指を器用に動かしている。しばらくして、ブラックボックスから手を引き抜くと、手品師がハンカチから鳩を取り出すように、握り締めた手を開いて、私の顔の前にお金を差し出した。
「あったよ、ジェイジェイ」
「いくらある？」
「百円玉が三枚と、十円玉が二枚、合計三百二十円なり！それに、レシートが一枚」
「それじゃあ、レシートは預かるから、残りのお金で、病院内にある自動販売機で、ジュースでも買ってきなさい」
「わかったよ、ジェイジェイ」
　ハヤテは、私にレシートを差し出すと、残されたお金を握り直し、兎というより、すばしこい子犬のように、病室を駆け出た。空地にも、病院にも、どこにでも犬は住んでいる。犬は、昔から人間の友達なのだ。
　ハヤテのあまりの勢いに、椅子が倒れ、下に隠れていたボールがベッドの方に転がってきた。私は、ボールを拾い上げ、お手玉感覚で空中に放り上げる。右手から、左手に。左手から、右手に。今から、六十年程前に、空き地で草野球をしたのと同じ感触だ。まさか、その時のボールではないだろう。窓から差し込んだ日差しが、ボールを照らす。石やアスファルトに当たったときの傷。握り締めた時の爪あと。全ての体験が、このボールに刻み込まれている。
「ジェイジェイ、買ってきたよ」
　翼が、はあはあと息を切らせて戻ってきた。両肩を上げ、素早い連続呼吸。開いた口からは、子犬の舌がみえる。酸欠状態になる前に、呼吸器官をフル回転させている。手には、左右一本ずつ、合わせて二本のお茶のペットボトル。
「ジェイジェイの分も買ってきたからね」
「そうか、どうもありがとう。ジェイジェイは、お茶でよかったけれど、ハヤテは、好物のオレンジジュースにしなくてもよかったのかい？」
「うん、僕も、お茶がいいんだ。最近、少し、太りぎみだから、パパから、糖分の多いジュースは、控えるようにって言われているんだ。それに、お茶のほうが、あっさりしていて、口の中がすっきりするよ。その方が、また、お菓子が食べたくなるんだ」
「それじゃあ、ジュースを飲むのと一緒で、カロリー多寡になってしまうぞ」
「そうだね、一緒だね」

　ハヤテは、何の屈託もなく笑った。私は、ハヤテからお茶を受け取ると、蓋を開け、ごくりと一口飲み干す。口の中の舌、喉、胃と上から順番に活動開始だ。私は、本当に生きている。
　ハヤテは、私のベッドに座ったまま、相変わらず、口を動かし、先ほどと同じ行動をとっている。口だけが生きているかのように見える。そう、人生の主役は、口なのだ。人は食物を摂取しているときのみ、平和のひとときを過ごせる。歴史を振り返れば、食糧を巡っての個人、集団、民族、国家間の争いは絶えない。食べるために争うのか、それとも、満腹後、充実した時間を過ごすために争うのか。だが、まもなく主役の交代の時がきた。私の手や肩がうずうずしている。
「ジェイジェイ、その手に持っているボールを貸してよ」
「ああ、いいとも」
　私は、軽くスナップをきかし、さっきまでの主役のボールとバトンタッチした。
「ありがとう」
　夢広がる未来の野球選手は、ボールをじろじろと見つめると、
「これ新品じゃないよね、ジェイジェイ。誰の物なのだろう？」
「さあ、ジェイジェイも、よくわからないな」
　そう答えながら、何の根拠もないが、昔、使っていたボールに間違いないと確信している自分がいる。空き地を駆け抜ける子どもの頃の自分の姿や、友だちのボールを投げる姿、バットを思い切り振る姿、さよならの声とともに自転車が散りゆく姿が、やや汚れたボールの白いスクリーンの上に映し出される。
「誰のものかわからないけれど、少しの間、使わせてもらおうよ。ジェイジェイ、それ、キャッチボールだ」
　ハヤテは、病室のドアまで後ろに下がると、ベッドに向かってボールを投げてきた。ボールは、私の寝ているふとんの上に落ち、半球程度沈み込んだ。
「よいこらっしょ」と掛け声を出さなければ、起き上がれない。頭と体は、それぞれ別の生き物なのだ。土下座してでも、手や足、腹筋、背筋の力を借りなければ座ることすらできない。いや、土下座さえ、意のままにならない。ああ、やっかいな生き物、それは人間。私は、ふとんの端を掴み、自分自身ではずみをつけて起き上がると、ベッドの上に座り込んでボールを右手で握り締める。
「ほら」
　腕は使わずに手首だけで、ハヤテに向かって軽く投げた。手加減をしたわけではないけれど、あまりに力が弱すぎてハヤテにダイレクトに届かず、ボールは病室の床面を三回バウンドして、ゴロとなって転がった。
「ジェイジェイ、届かないよ」
　この部屋のエースピッチャーは、床の上でじっとして動かないボールを拾うと、もう一度、私に向かって投げてきた。
「悪い、悪い。ずっと寝すぎたためか、体が少しなまってしまったみたいだな。次こそは、ジェイジェイの本当の力を見せてやるぞ」
　もう心配はいらない。口だけは、軽やかに動く。

「それ」
　ボールよりも、声が先にハヤテに届き、その後、壁にぶつかり跳ね返り、私の耳元に戻ってきた。やまびこではなく、部屋びこだ。音は、ボールよりも早い。ただし、早く届くからといって、コミュニケーションが図れたわけではない。互いの会話をキャッチボールする中で、人は人と意思の疎通が可能だ。一方的な叫びは、代償の必要ない会話であり、最初から相手を拒絶している。
「ＯＫ、今度は、届いたよ」
　監督から、お褒めの言葉をいただく。
「今度は、僕の番だ」
　狭い病室のため、大きく振りかぶっては投げられない。それでも、小学一年生級のスピードボールが来る。伸びゆくものと、衰えていくもの。その差は、加速度的に開くばかりだ。
「ストライク！」
　ハヤテのボールを両手でしっかりと掴む。もし、ボールを弾くのであれば、胸で抱きかかえればいい。胸で抱きかかえられなければ、体全体で受け止めればいい。このボールは、私とハヤテとの意思のキャッチボールなのだ。そして、ハヤテから次の世代へと引き継がれていく。
「さあ、もう、一球」
　ボールを投げ返し、次なる意思を待つ。しっかりと両手でボールを受け止めるハヤテ。そして、第二球目。ボールは、更に勢いを増した。私はスピードについていけず、手を出すタイミングが少し遅れる。ボールは、私の両手をはじき、後ろの窓ガラス当たった。
「あっ、大丈夫、ジェイジェイ？」
　心配したのか、ハヤテがベッドの側まで駆け寄ってきて、私の手を握る。
「へえ、ジェイジェイの手は、こんなにやわらかかったんだ」
　不思議そうに、私の手を撫でる。
「ハヤテが赤ちゃんのとき、この両手で抱きかかえ、高い高いと持ち上げたり、水族館へ行ったときは肩車をしたりして、よく活躍したものだ」
「へえ、僕を抱きかかえるなんて、ジェイジェイ、力が強いんだ。パパとジェイジェイとどちらが強いの？」
「もちろん、ジェイジェイだよ。ハヤテのパパが赤ちゃんの頃、ジェイジェイはそのパパを抱きかかえたんだから」
「そうなの？それなら、ジェイジェイが、赤ちゃんのときは、誰が抱っこしたの？」
「それは、もちろん、ジェイジェイのお父さんだよ」
「それじゃあ、ジェイジェイよりも、ジェイジェイのお父さんの方が、力が強いことになるね」
「あっ、はっ、はっ、はっ、は。そうだね、ハヤテの言うとおりだ。」
　まだ、首をかしげているハヤテ。
「そうなると、ジェイジェイよりも、ジェイジェイのお父さんの方が力持ちで、ジェイジェイのお父さんよりも、ジェイジェイのお父さんの、お父さんの方が、力が勝っていることになるの？」

「そうだね」
　子どもが、頭をひねる姿は、なんとも微笑ましい。自らの頭で未知の世界に挑戦し、格闘しているのだ。世界は、君のために開かれる。
「ジェイジェイのお父さんの、お父さんの、お父さんの・・・。なんだか、訳がわからなくなってきたよ。とにかく、僕の祖先は、とてつもなく大きくて、力が強くて、ひょっとしたら、生まれたての地球を抱きかかえていたということ？」
「そうかもしれないね、ははは。ハヤテは、ユニークな考え方をするね。それは、大変素晴らしいことだよ」
「となると、反対に、僕より、僕の子どもは、力が弱くて、僕の子どもより、僕の子どもの僕の子どもはもっと力が弱くて・・・。どんどんどんどん、力がなくなってしまうのかなあ。そのうちに、どこかに消えていってしまうんじゃないの。それは、悲しくて、寂しいね」
「そうだね、使わない筋肉は、どんどんとやせ細っていくんだよ。ジェイジェイだって、昔は、腕立て伏せなら、五十回は連続してできたのに、今では、十回でさえ、ふうふうものだ」
「それって、進化なの、退化なの？発展なの、衰退なの？」
「難しいことを聞くね。さあ、それはわからないな。ただ、どちらにせよ、ハヤテの意志のある方向に進むことはできるよ」
「それなら、ジェイジェイはどちらに進んでいるの？」
「今は、ハヤテとのキャッチボールに、夢中さ」
　その時、病室のドアが開き、息子の翼が戻ってきた。
「あれ、父さん、もう起き上がっても大丈夫かい？もうしばらくは、横になっていたほうがいいんじゃないのかい？ハヤテ、ジェイジェイは、まだ、完全に病気が治っていないのだから、無理を言っちゃいけないよ」
「だって、僕も、病気になるくらい暇だよ。それに、ジェイジェイだって、寝すぎて腰が痛いと言っていたよ。このままだと、二人とも、ベッドの中に入院しちゃうから、ジェイジェイのため、僕のために、運動しているんだ」
「運動だって！病室は、遊ぶところでも、走り回るところでもないよ。静かに、体を休めるところだ。体を動かすのも、お医者さんの指示があってから、リハビリをするんだよ。もちろん、リハビリだって、ちゃんとした治療の一環なんだ」
「ふーん、じゃあ、今から、僕がジェイジェイ専属の医者になるよ。ジェイジェイの心と体を治してあげるんだ」
　ハヤテは、腰に手を当て、胸を張って答える。あんな小さかったはずのハヤテが、今は、私には大きく見える。
「あはははは、もういいよ、翼。ハヤテは、ハヤテなりに、ジェイジェイのことを心配してくれているんだ。ハヤテが、さっき言ったように、ジェイジェイは寝すぎて、背中や腰が痛くなっていたんだよ。でも、なかなか起き上がれなくて、やっと、ハヤテの声に励まされて、こうしてベッドの上に座ることができたよ。本当に、ハヤテは、名医だよ」
「それなら、じゃあ、さっきの続きだよ、ジェイジェイ」

　ハヤテは私に向かって、再び、ボールを投げてきた。
「まあ、父さんが、そう言うのなら、構わないけどね。みかんと柿とバナナを買ってきたから、ベッドの横のテーブルの上に置いておくよ」
「パパ、なんだかそれ、信号機みたい」
「信号機だって？」
「ほら、柿は、赤だし、バナナは黄色、みかんは、まだ、青い」
「あっはっはっは、なるほど、信号機だな。ハヤテは、なかなか面白いことを言うな。それじゃあ、今、青いみかんが光っているから、キャッチボールはＯＫだ」
「でも、青いみかんの中は、黄色い果実だから、要注意だよ」
　ハヤテは、買ってきたばかりの袋からみかんを一個取り出すと、皮を剥き、ひと房を自分の口に放り込むと、残りを私に差し出した。
「う、うまい、座布団三枚ものだ」
　ハヤテの切り返しに思わず頷く私。みかんのジューシーな味が口の中、体中に広がる。彼が、また、一回り成長した。
「何を誉めているんですか、父さん。そんなにおだてると、すぐに舞い上がってしまう性格なんですよ、ハヤテは！」
「そう言う、翼、お前も、同じだったはずだぞ。百点取った後の試験は、必ずといっていいほど、六十点台だったはずだ。もう一度見直しをすれば、ちゃんと問題が解けるはずなのに、簡単な計算間違いで、何度も失敗したはずじゃなかったかなあ」
「そんなのことは、とうの昔に時効ですよ」
「へえー、父さんも、僕と同じ性格だったんだ。そうなるとさっきの遺伝の話じゃないけれど、ジェイジェイだって、僕やパパと同じ性格なんじゃないの？」
「ストライク！今の指摘は、まさに、ジェイジェイの心のど真ん中に当たったよ、それ」
　私は、布団の上に落ちたボールはそのままにして、袋からもう一個の青いみかんを選ぶと、翼に向かって投げた。不意を突かれたものの、昔とった杵柄ならぬ、グラブさばきで、みかんを左手で軽く掴む息子。
「おっ、うまいじゃないか。昔、よく、家の前の道路で、キャッチボールをしたなあ」
「そうだね、父さん。父さんは、何かにつけて、俺をキャッチボールに誘ったね」
　翼は、左手から右手にみかんを持ち替え、自分の息子のハヤテに軽くトスする。三角キャッチボールの始まりだ。
「そうだよ、パパだって、僕をよく、キャッチボールに誘うよ」
　父から投げられてきたみかんを両手で捕るハヤテ。みかんがつぶれないように、取った瞬間、両手を軽く後ろに引く。細かい動作だ。これも、翼が教えたのか。それとも、自分で習得したのか。私も、翼が小さい頃、ボールを柔らかく捕球するコツを体で覚えさせるため、家の中で、生卵のキャッチボールをしたものだ。その後の夕食は、決まって、目玉がつぶれた目玉焼きか、スクランブルエッグか、卵料理のおかずが一品よけいに付いたものだ。時には、翌朝の卵焼きに変わることもある。

私から翼へ。翼からハヤテへ、ハヤテから私へ。父から子へ、子からその子へ、そして、再び、孫から私へ、キャッチボールの輪が広がる。永遠に続くかも知れない、また、続いて欲しいと願わざるを得ない、三世代のキャッチボール。意思は、どこへ。

八回表

シュッ。
ドーン、トン、トン、トン、トン。
シュッ。
ドーン、トン、トン、トン、トン。
規則正しく刻まれるリズム。
だが、ドーンの後に、ピシッツとか、ガキーンという違和感のある音がして、ドッ、ドッ、ドッ、ドッとボールを追いかける足音が聞こえることもある。
繰り返される音たち。
少年は、ひたすら、壁にボールを投げ続けている。いわゆる壁当てだ。
家のブロックの壁に、膝から、肩口までの、四つのブロックをストライクゾーンにして、ピッチャー役となり、一球、一球、丁寧に投げ込む。毎回、同じように投げているつもりなのに、必ずしも、真ん中には当たらない。ブロックの角に当たると、真っ直ぐに戻ってこないで、予想もしない方向にボールは跳ね返る。時には、道路の用水路の中へ、時には、大きくバウンドして、道路を隔てた向かいの家の庭に飛び込むこともある。そんな場合は、まず、塀越しに庭の中を覗き、転がったボールの位置を確認する。今日は、縁側の下に転がっているので、すぐに見つけることができた。だが、植木鉢や植栽の中に隠れてしまえば、外からぱっと見ただけでは十分に分からない。そんな時は、おおよその見当をつけ、庭の中に入ってから、隈なく探すしかない。以前は、一人暮らしの、八十は超えると思われるおばあさんが、日向ぼっこがてら、玄関口の椅子に座っていたので、「すいません、ボールが入ったので、とらせてください」と頼むと、いつもにこにこしながら頷いてくれていたが、ここ最近は、姿が見えない。カーテンは閉まったままだ。玄関のドアホンを何度も押し、ドアホン越しに庭に入らせてくださいとお願いをするが、返答はない。仕方がないので、「失礼します」とわざと隣近所に聞こえる程の大きな声を上げ、門扉を開き、足早に玄関から庭に回る。中庭に、さつきの鉢や松の盆栽などを置いていれば、ひょっとボールが当たって、蕾や枝が折れていないかと心配しなければならないが、幸いなことに、この家の庭には、植栽はなにもない。おばあさんが元気な頃は、四季折々に、朝顔やひまわり、菊、シクラメンなどの花を育てていたようだが、今は、空の鉢が家の軒下に積み重ねられている。花が消えていくとともに、蝶々やミツバチなどの虫、木の実をつつく鳥も、庭を訪れなくなった。家の所有者は、定期的に来るのか、雑草はきちんと抜かれ、きれいに掃除されているけれど、むき出しの土が、かえって、寒々しく感じられる。この庭にたまに訪れ、賑わいをつくっているのが彼ということだ。

「あった、あった」
塀から見たように、縁側の下にボールは転がっていた。しゃがみ込み、手を伸ばして、ボールを掴む。再び、玄関に回り、門扉の鍵を閉め、「ありがとうございました」と頭を下げる。家の中からは、誰の返事もなく、自転車や犬を散歩させている通りすがりの人が、こちらを振り向くだけだ。
ボールを手にした彼は、アスファルトの道路に水で引いたピッチャープレートに戻る。これまで、何度となく壁当てを繰り返した経験から、投げた瞬間に、ボールがどの方向に跳ね返るのか、咄嗟に、分かるようになった。五感とそれを束ねる第六感がどんどんと研ぎ澄まされていく。だが、時には判断が誤り、右方向に飛んだのに、思わず左足が一歩出てしまい、重心が左半身に傾いてしまうこともある。そんな時でも、直ぐに、体勢を立て直し、ボールの方向に右足を踏み出す。そして、左足も続く。ただし、一人キャッチボールも、十分も時間が過ぎれば飽きてくる。肩もかなり温まってきた。体も俊敏に、前後、左右に動く。
そんなとき、彼は、ストーリーを作って、一人野球ゲームに興ずる。まずは、チームを二つに分ける。彼Ａチームと彼Ｂチームだ。彼Ａチームのピッチャーは、本格的な上手投げ。打線を紹介する。一番は、大柄だが、足の速さはチーム一の選手。もちろん、足の速さを最大限に活かすため、左打ちだ。二番は、小柄で、バントなど小技がうまい選手。三番は、安打製造機の異名を持ち、センター返しが得意。四番は、もちろん大砲だ。一発当たれば、場外ホームラン。ニックネームは、トマソンでも、大型扇風機でもない。顔はやさしいけれど、ゴジラのニックネームを持つ。打率は、常に三割をキープしている。ホームランバッターだからと言って、大振りばかりしているわけではない。どうしても点が欲しいときは、チームのためミートに徹する。五番は、四番に負けず劣らずの馬力を持つ。調子がいいときは、三番、四番と打順を交代しても遜色がない。六番は、シェアなバッティングが持ち味。下位打線からでもチャンスを作る。七番は、バントやヒットエンドランで、確実に塁を進める。八番は、想定外の八番バッターとして、恐れられている。ツーアウト満塁の最大のチャンスで、惜しくも三振するときあるし、前の打者二人が簡単に三振を奪われ、チャンスの目がなくなり、次の回が攻撃の勝負だと選手みんながグラブを手にしたところで、目の覚めるような大ホームランを打つこともある。意外性のあるバッターで、それが彼の魅力だ。八番バッターから、攻撃の口火が切られることも多い。末広がりの八のお陰か。そして、九番は、ピッチャー。チームの大黒柱だ。体も大きく、力も強い。時には、攻撃の主軸として、クリーンナップに座ることもある。だが、今日は投球に専念するため、九番に控える。さあ、これが、彼Ａチームのメンバーだ。ピッチャーを始め、各選手を、それぞれの場面において彼が演じる。もちろん、野球は、相手チームも必要だ。
次は、彼Ｂチームの選手の紹介だ。ピッチャーは、横手投げ。左右のコントロールは、抜群だ。時には、シンカーなど落ちる球も投げる。いくら、強力打線を誇る彼Ａチームでも、今日は、なかなか打てないぞと選手同士、目で合図しあっている。
さあ、まもなくプレイボールの時間だ。試合開始に先立って、もう一度、家の壁のストライクゾーンを確かめる。色が薄くなってきているため、赤色のチョークで、以前引いた線の上をなぞる。そして、盛り上がってはいない道路のマウンドに戻ってくると、ジョロで水の線を引く。投げ

たボールが跳ね返ってきた場合、ファウルかどうかを判断するため、内野グランドの線も引く。もう一度、ルールの確認だ。ピッチャーがボールを投げる。壁に描かれたストライクゾーンに入れば、暫定ストライクとなる。その判断は、投げた本人が下す。そして、暫定ストライクとして跳ね返ってきたボールを捕って初めて、正式のストライクが取れる。だが、そのボールを後逸したり、はじいたりしたら、相手チームのヒットだ。マウンドの後ろには、空き地が広がり、転がった場所によって、シングルヒット、ツーベース、スリーベースに分かれている。一番奥のブロック塀にまで当たれば、ホームランだ。だから、ピッチャーとして投げるだけでなく、内外野の守備、公平な審判もこなさないといけない。本当に、忙しい。だけど、お陰で、速い球や遅い球などスピードに変化をつけ、ストライクゾーンぎりぎりを投げ分けるピッチャーの練習にも、ストライクゾーンを正しく見極める審判の練習にも、膝を曲げ、腰を落とし、自分の体でボールを止めることはあっても、絶対に後ろに逸らさないで捕球する守備の練習にもなる。一挙二得に、もう一つの得が加わり、大変お得な練習方法だと自負している。まして、試合全体を記録するスコアラーであったり、監督・コーチの役を担ったり、今のボールは早かったなあ、とか、ええっ、あのコースはボールなのか、とか、観客の立場に立っても楽しめる。うーん、一体、一人、何役をこなしているのだろうか。瞬間、瞬間で、様々な役割を演ずるから、将来は、舞台に立つ俳優になれるかも？でも、彼の望む本当の舞台は、野球のグラウンドだ。

さあ、始めるぞ。彼は、自分に気合を入れ、マウンドにつく。まずは、ピッチャーの役割だ。彼Ａチームのピッチャーは、オーバースローの本格派。球の速さは、ピカ一だ。思い切って投げていけ。自分の中の監督・コーチ、そして、守備についている仲間、応援してくれている観客からの声援が飛ぶ。もう一人の自分ではなく、もう百人、もう千人の自分たちが、自分を応援してくれる。なんて、ありがたいことだ。今日も、一段と、応援の声が球場全体に、地鳴りのように広がっている。

道路球場で、試合開始のサイレンが鳴る。それは、彼の口笛。

「プレイボール」

目には見えないが、頭の中の、バーチャルな主審が、やや霞みがかった春の空の雲を掴むかのように、手を上げる。その指先の方向には、将来、プロ野球選手になるという彼の希望の星が瞬いているはずだ。ただし、今は、昼のため、はっきりとは確認できない。それでも、彼は、その星に向かって、一歩、一歩進もうとしている。

「よし、いくぞ」

彼は、自分自身に語りかけ、腕を希望の星に向かって、高く上げ、大きく振りかぶり、第一球目を投げる。

「まずは、ど真ん中の直球だ、打てるものなら、打ってみろ」

しなった腕から、最後にスナップをかけ、親指、ひとさし指、中指からボールが離れた。ボールは、彼の意思どおりに、家の塀のブロックに描かれたストライクゾーン目掛けて、直線で突き進む。見事、ブロックの真ん中に的中した。

「ストライク」

主審の彼がコールする。

今日は、まずまずの調子だと頷くピッチャーの彼。
だが、ここで安心してはいけない。ブロック塀に当たって、跳ね返ってくるボールを、キャッチしないと、ストライクを取ったことにはならないし、弾いたり、後ろに逸らしたりすると、ヒットになってしまう。折角のストライクが水の泡だ。
すぐさま、守備の彼に変身する。
思いきり投げられたボールは、アスファルトの地面に当たると、大きくバウンドした。ボールを速く投げれば投げるほど、返ってくる球も速い。その分、瞬時の判断で、動かなければならない。ただし、ストライクボールならば、ボールは真っ直ぐに、自分のところに戻ってくる。投げた後、体勢が崩れていても、グラブを前に出せば捕球できる。先ほどの一球目も同様だ。ワン、ツー、スリーの掛け声とともに、ボールは、難なく、グラブに収まった。これで、初めて、ワンストライクだ。
試合開始いきなりのど真ん中の直球に、なすすべもなかった相手チームの一番バッターの彼。
「さあ、二球目だ」
キャッチャーからのサインは外角低め。大きく頷く彼。
再び、大きく振りかぶり、腕をしならせて、投げる。目はブロックの左隅を見つめている。微妙に、投げ下ろす角度を変えて、外角低めいっぱいを狙う。同様に、踏み出した足のつま先も左隅方向に向ける。手と足は、同じ仲間だ。
「ボール」
内なる、主審の彼の声がした。
惜しい。ボール一個分、外側にはずれたようだ。残念がっている暇はない。ボールは、直ぐに跳ね返ってくる。このボールを捕球しなくても、ヒットにはならないが、後ろに逸らしたら、自分で走って取りにいかなければならない。そうなると面倒だ。やはり、どんなボールでも、しっかりと捕球しなければならない。ただし、斜め方向に投げた分だけ、ボールは、今の位置よりも、反対方向にバウンドする。それに、低めだと、バウンドは小さく、ゴロで転がってくる。膝を曲げ、腰を落とし、グラブが地面にすれるぐらい近づけなければ、捕球できない。
「よし」
ファーストの彼が、足元を抜けそうなボールを、大きく左足を一歩踏み出し、グラブで掴む。
「ナイス、フィールディング！」
ピッチャー役の彼からの声援だ。大きな声を出すことは、互いのコミュニケーションを図るためだけでなく、自分の心も盛り上げてくれる。他人から見ると、壁にボールを投げている者が、大声を出していると、変に思うかもしれないが、本人は、いたって真面目だ。気合が入って、自分のストーリーの中に、没頭できる。そうなると、逆にこちらのもの。一生懸命、汗を流し、打ち込んでいる姿は、人に感動を与え、思わず、応援したくなる気持ちにさせる。時には、自転車に乗った見知らぬおじさんが、「僕、頑張れよ」、「将来は、プロ野球選手か」と、励ましの声を掛けてくれる。近所の犬の散歩をしているおばさんは、にこにこしながら、会釈をしてくれる。彼一人だけの世界ではない。周りのみんなが、彼の世界に参加してくれる。彼は、より一層、自分の物語の基盤を強固にできる。

「ワンストライク、ワンボール。さあ、三球目だ」
　常に、自分で、カウントを数える。スコアラー兼球場関係者だ。
　次の球種は？
　キャッチャーの彼に確認する。
　首を立てに振り、次の体勢に移る。
　投げた。ボールは、内角高めを狙う。先ほどのコースが内角低めだったので、バッターはやや前のめりにベースに近づいている。そのバッターの意表をつき、胸元をえぐるつもりだ。ボールは、ブロックの右上の隅に当たった。微妙なコースだが、判定は、ストライク。高目のボールは、空中での浮遊時間も長い。ノーバウンドのまま、彼の足元に落ちた。大きくバウンドすると頭を越えて、後ろに逸らす可能性が高い。その前に、ボールを小バウンドで捕球しようと、投げたピッチャーの体勢から、急いで守備の構えに戻るが、一瞬、遅れた。ボールは、グラブの下を抜け、アスファルトの地面でバウンドすると、後ろの空き地に転がっていく。抜けた。ヒットだ。ボールに勢いがある。長打コースは、間違いない。急いで、押さえなければ。彼は体の向きを変え、必死で追い駆ける。ボールは、雑草と砂利石のグランドを、大きくバウンドしながら、一番奥の塀まで転がった。通常なら、三塁打だ。大きく息を弾ませながら、ボールのところまで辿り着いた外野手の彼。右手で、直接ボールを握ると、振り向きざまに、ホームベースに向かって、ノーバウンドで投げ込む。ボールは、直線の軌道を描き、ブロックの真ん中を射抜く。
「アウト」
　彼の頭の中で、サードベースの審判の手が上がる。
　そう、ボールを後ろに逸らしても、捕球した場所から、ノーバウンドでも、ワンバウンドでもいいから、ストライクゾーンのブロックに当たれば、アウトにできる。実践さながら、ピッチャーだけでなく、野手の守備練習も兼ねているのだ。
「ナイス、フィールディング」
「ナイス、好返球」
　次々と、自分の中の仲間たちから、声が掛かる。
　さあ、仕切り直しだ。ピッチャーの役の彼の出番に戻る。
　ボールが少し高すぎた、それに、真っ直ぐのボールが続きすぎたな。低めの次の高めのコースは、相手の裏を読んだつもりだが、逆に、相手に見抜かれてしまった。反省、反省。次に繋がる反省だ。キャッチャーの彼をマウンドに呼んで、もう一度、打ち合わせだ。
「ワンアウト、ワンアウト」
　内野、外野からの声に元気づけられて、二人目の打者を迎える。ワンアウトを取ったものの、試合が始まったときと同じように、緊張した気持ちで、勝負に挑む。一期一会の諺ではないが、打者に対しては、ピンチの時も、投球が調子のいい時も、新たな気持ちで、望まなければならない。相手が四番バッターでも、下位打線でも同じだ。
「よし、いくぞ」
　キャッチャーとの最終サインを確認し、ブロック塀に、ボールを投げ込む。腕の振りの勢いが増した。

「ストライク」
　真っ直ぐだが、内角低めの厳しいコース。
　バウンドして返ってくるボールも難なく、グラブに収める。
　マウンドに立ち、ブロック塀の後ろにいる幻影のキャッチャーと、次の球の確認だ。
　第二球目を投げ込む。
　今度は、落差の大きいカーブ。第一球が、速球だったため、バッターには、ボールの到達時間が先ほどの倍ほどに遅く感じられる。打つタイミングを逸したバッターは、ややのけ反り、ただバットを持ち、立ち尽くすのみ。
「ストライク」
　彼にしか見えない、主審が拳を握って、コールする。
「いいぞ、いいぞ、ナイス、ピッチング」
　後ろを守っていてくれる仲間たちから熱い声援が、次々と聞こえてくる。もう、僕は一人じゃない。
　反対に、相手ベンチから、野次が聞こえてくる。
「バッター、ドンマイ、ドンマイ。へっぽこピッチャーの球なら、次は間違いなく打てるぞ」
　今日の敵は、明日は味方だ。プロのピッチャーならば、どんな状況でも、冷静でいなければならない。心が乱れると、不思議なことに、ボールのコントロールにも影響がでる。それこそ、相手の思う壺だ。そんな声を無視し、答えはこの球にあるとばかりに投げ下ろす。
　ボールは、真っ直ぐだが、シュート回転で内角に切れ込み、また、ややホップ気味で、バッターの胸元を抉る。バッターは、つい、高めのボールに誘われ、手を出す。しかし、バットは、二次元の世界を彷徨だけで、三次元の世界のドアを叩くことはできなかった。
「ストライク、バッター、アウト」
　主審は、サードベース側に、二、三歩踏み出すと、全身を使った大きなジェスチャーで、バッターを始め、ピッチャー、キャッチャー、守備側の選手全員に、また、両軍ベンチに、球場に観戦に来ている観客全員に向かって、コールする。この瞬間こそ、主審が、自らの存在をアピールできる桧舞台だ。すべての者が、野球を愛している。
　審判の派手なパフォーマンスに、観客たちは拍手で応える。みんなで、野球を楽しもう。みんなで、野球を盛り上げよう。選手も、観客も、裏方も、一緒になって。一人でも多くの人々が共有する時間こそ、生きている証なのだ。時間は、与えられるものでなく、自らが作り出すもの。使うものでなく、生み出すもの。
　攻守交替。次は、彼Ａチームの攻撃の番だ。彼は、Ｂチームのピッチャーにボールを手渡す。敵であり、味方でもある自分に。
「さあ、頑張っていこう」

　八回裏

　その時、車のクラクションが聞こえてきた。音のするほうに振り向くと、彼の父の車が、こちら

に向かってきている。平日のこんなに早い時間に帰ってくるなんて珍しい。彼は、すぐさま自分の世界から、現実の世界へと立ち戻った。そこには、緑があふれる芝生も、ポップコーンを片手に応援する観客の姿もなく、ただ、アスファルトの道路とブロック塀があるだけだ。車は、彼の目の前に止まった。ジーという音を立てて、窓ガラスが下がり、彼の父が話しかけてきた。
「今日も、頑張ってやっているな、ハヤテ」
「うん、もう、一時間近くやっているよ、父さん。父さんこそ、いつも夜の九時過ぎに帰ってくるのに、今日は、いやに早いね」
「いや、今から、遠方の場所の会議に出掛けなければならないんだ。だけど、三十分程度は余裕があるから、少しの間、久しぶりに二人でキャッチボールをやるか。一人で壁当てばかりではつまらないだろう。それに、ハヤテがどれだけ上手くなったのか、父さんも自分の目で確かめてみたいからな」
「いいよ」
　彼は、特段、つまらなくもないし、一人ぼっちでもなかったが、父の申し出を承諾した。頭の中の友人たちに、ひと時の別れを告げる。
「また、会おう、僕の仲間たちよ」
「いいとも、僕らは、いつも君を待っているし、君の父は、僕らの父でもあるんだ。久しぶりに、親子のキャッチボールを楽しんでくれ」
　彼の仲間たちは、手を振り、グラウンドからベンチへと消えていく。束の間の休憩タイムだ。
　彼の父は、車を駐車場に止め、一旦、ドアから出て背広の上着を脱ぎ、運転席に置いた。そして、ネクタイを緩め、長袖の白いワイシャツを肘までめくり上げ、いつでも、野球ができる態勢に入った。
「グラブは、ここだな」
　彼の父のグラブは、家の軒下にある道具箱の一番下に眠っており、油分が飛んだせいか、光沢のある茶色が、今は、かなり白けていた。
「さあ、いつでも来い、ハヤテ」
　彼の父は、合図するかのように、大きく左手のグラブを上げた。
　彼は、再び、ピッチャー役に戻った。頭の中から聞こえる満員のスタジアムの大歓声の後押しを受け、両手を大きく振りかぶり、父親のグラブ目掛けて、ボール投げ込んだ。
「ストライク！」
　今からのアンパイアは、彼の父だ。
「いい球だ。だけど、もう少し、ゆっくり投げてくれないか。ボールの勢いが強すぎて、手が痛いよ。それに、このグラブは、父さんが、子どもの頃から使っているんだ。大分ボロがきているせいか、ボールを受ける腹の部分が薄くなっているな。直接、手のひらで受けているみたいだよ」
　彼の父は、グラブの真ん中を右手で撫でる。グラブの上からも、手の感触が伝わる。
「それに、このボール、どこかで見たことがあるな」
　彼の父は、ボールを手に取り、今にも、マンションに隠れそうな太陽にかざした。

「父さんが子どもの頃は、太陽が沈むのがもっと遅かったはずだ。今では、高層マンションや商業ビルがあちらこちらに立ち並んだせいか、暗くなるのが早くなったような気がするよ」
「でも、道路には、ヘッドライトやテールライトを照らした車が行き交うし、マンションやビルの踊り場や通路、事務所の中でも、夜遅くまで煌々と明かりが点いているから、結構、道路周辺は明るいよ、父さん。だから、夕食後に外に出て、素振りと壁あての練習ができるんだ」
「そうか、時代が変わっても、世界中の明かりの総和は、同じなのかな。夜も明かりが欲しいという人の欲望が増えるだけ、昼間の自然の明かりが減るわけだ」
　彼の父は、手首だけを使って、ボールを投げ返した。ボールは、小さな地球の弧を描き、彼のグラブに納まった。地球は、いつまでも球形だ。
「ストライク」
　今度は、彼が主審となった。
「父さんも、いいコントロールしているね」
「ははは、年をとっても、まだまだ、若い頃に比べて、技術は変わらないか。だけど、残念ながら、体力は少しずつ衰えているから、ハヤテのような速い球は投げられないな」
「大丈夫だよ。父さんなら、僕よりも、もっとすごい球を投げられるよ」
　彼は、再び、振りかぶり、昔、彼の父が投げていたと思われる以上の速球を繰り出す。今は、
　誰の応援もいない。彼と彼の父の二人だけが道路に立っている。
「ストライク、ツー。いい球だ。毎日のトレーニングの成果だな。ほら、見てみろ。あまりにハヤテの球が速いから、グラブから煙がでているぞ」
　彼の父が、ボールをグラブの真ん中に、ポンポンと投げ込むたびに、白い煙が巻き起こる。
「それって、煙じゃなくて、埃じゃないの、父さん」
「ははは、そうとも言うか。父さんのこれまでの練習の成果が、こうして、グラブから湧き出ているんだ。父さんにとっては、埃じゃなくて、誇りさ」
　ボールは、山ボールから、やや平坦の形となり、スピードも増して、返ってきた。
「でも、その白い煙が出れば出るほど、父さんが、それだけ歳を取ったということじゃないの」
「はは、父さんは、浦島太郎か。それにしても、うまいこと言うな。確かに、このグラブから煙が出るたびに、白髪が一本ずつ増えていったような気がするよ。だからこそ、ハヤテも、今、使っているグラブを大事にしろよ。そのグラブが、お前が生きてきた証拠、お前が頑張ってきた証明になるんだからな」
　彼は、もう一度、大きく振りかぶり、父に目掛けて、ボールを投げた。心なしか、父のグラブが、父の手が、小さく見えた。
「ストライク、バッター、アウト」
　その父の声も、さっきよりも聞こえにくくなったような気がする。
「もっと続けたいけれど、残念だが、もう時間だな」
　彼の父は、ポケットから携帯電話を取り出すと時間を確認した。
「ハヤテは、本当に、上手くなっているな。わずか三球だけど、十分、上達の手ごたえを感じたよ。また、時間がとれたら、キャッチボールをしよう。今度は、父さんがピッチャー役だぞ」

　彼の父は、ボールの入ったままのグラブを、息子に渡すと、めくりあげたワイシャツの袖を下ろし、ネクタイをもう一度締め直して、車に乗り込もうとした。
「ハヤテ、もうそろそろ暗くなるから、野球の練習は止めたほうがいいぞ。汗も掻いていることだから、早くお風呂に入りなさい」
「わかったよ、父さん。それで、父さんは、何時頃、帰ってくるの」
「そうだな、今から、二時間程度の会議だから、九時過ぎになると思うよ。だから、父さんは待たなくていいから、先に食事をしておきなさい。母さんには、朝、話をしているけれど、念のためもう一度、ハヤテからも伝えておいてくれ」
　彼の父の車は、息子をひとり残して、車庫から滑り出た。
　彼は、父に手を振って見送ると、彼と父のグラブ、そしてボールを、道具箱に片付けようとした。先ほどまでなら、白いボールがはっきりと見えるほど明るかったのに、今では、そのボールも辺り一面の夕闇に溶け込むほど暗くなっていた。
「急がなくっちゃ」
　彼は、そう呟くと、道具一式を箱の中に落とし込んだ。その際、ボールが跳ね、箱から飛び出し、道路に転がった。
「いけない」
　彼は慌てて、ボールの後を追ったものの、ちょうどその時、家の前を車が通り過ぎた。
「危ない」
　車のクラクションの音に、彼は急いで後ろに跳び下がる。ボールは、どこに行ったのだろうか。多分、車の下を抜けて、反対側の空き地に転がったのだろう。彼は車の通り過ぎた後、向こう側の空き地をすみずみまで探したが、夜のカーテンは、既に半分以上引かれていて、ボールを見つけることができなかった。
「まあ、いいや。明日の朝、いつもより早く起きて、明るくなってから探そう」
　彼は、自分にそう言い聞かせながら、玄関の扉を開けた。
「母さん、ただいま。父さんは、遅くなるんだって。僕は、お腹がすいたよ。ごはんにしよう！」
　彼の声が、玄関先から廊下を伝わり、居間や食堂、二階のハヤテの勉強部屋まで、家中に響き渡る。
「また、野球の練習をしていたんでしょう？汗を掻いたはずだから、ごはんの前に、先にお風呂に入りなさい。今日は、必ずシャンプーをしなさいよ。頭が臭いわよ」
　母の姿は見えないけれど、声だけが聞こえてくる。夕食の準備のため、キッチンにいるのか。それとも、二階で洗濯物を片付けているのか。
「わかったよ。今から入るよ」
　彼は、玄関で靴を脱ぎ、明日に備えてきちんと揃える。洗面所のすべり戸を開けて、風呂場に向かう。着ていた服をすべて洗濯機の中に放り込み、かけ湯も面倒くさいと言わんばかりに、満杯にお湯が張った浴槽の中に飛び込んだ。
　ジャボーン。

いくつもの玉のような水しぶきが上がった。その瞬間、彼は空中の水滴を右手で掴む。どこでもキャッチボールだ。水玉は壊れ、彼の腕から浴槽にしたたり落ちた。

走ってきた車の後輪に跳ね飛ばされたボールは、再び、彼の家の玄関前に戻ってきた。道路の端を転がり、蓋が開いたままの水路に転がり落ちた。天と地が、再び、キャッチボールをするために。

九回表

チーンー。
鈴の響きが終わるとともに、父との思い出は消えた。
「さあ、ハヤテ、次は、お前の番だ」
父に促され、仏壇の前に立った少年は、線香に火を点け、鈴を鳴らす。手を合わせた隙間から、線香の煙が漂ってくる。沈黙の時間が流れた。
お辞儀した顔が上げ、後ろに振り返った少年は、傍らにいる父に話しかけた。
「父さん、キャッチボールでもしようか」
「キャッチボール？そうだな、やるか」
父はまだ座ったままだ。手は、数珠を握りしめている。彼は、仏壇に手を合わせると、深々と一礼し、居間から家の外に出ようとした。父も、息子につられて立ち上がった。
「あら、お父さんに、ハヤテ、今からどこへ行くの。少し休んで、お茶でも飲まないの。近所で評判の大粒イチゴの大福があるわよ。ジェイジェイの大好物だったので、お供え用のほかに、余分に買っておいたの」
「ジェイジェイは、仏壇の中で、既にお茶を飲んで、大福餅は食べ終わっているよ。今から、僕と父さんは、ジェイジェイも含めた三人で、キャッチボールをするんだ」
「ジェイジェイと？あなたたち、本当に、キャッチボールが好きなのねえ」
母は、半ばあきれ、半ばうらやましそうに、呟く。
「父さん、さあ、行こう」
息子に急がされて、父も一緒に動く。
「おっと、その前に、ジェイジェイも誘わないとな」
父は、仏壇の前で、もう一度鈴を鳴らし、静かに手を合わせた。
「さあ、ハヤテ、行こうか」
何かがふっきれたように、今度は、父の翼が、先頭に立って玄関を出た。
今は、二月の終わり。暦の上では、まだ冬だが、空気は、確実に春に衣替えしている。その証拠に、日向に出ると暖かく感じ、思わず羽織っていた上着を一枚脱ぎたくなる。まして、軽く運動をすれば、夏とは言わないまでも、顔に、背中に、汗をかく。その時、一陣の風が舞い込めば、爽快感が増す。学年末と進級、卒業と入学、就職など、何かに区切りを付け、一から始める季節は、もう直ぐだ。新しい希望が芽吹いている。
「はい、父さん」
ハヤテは、もう既に、艶も、膨らみもない使い古しのグラブを手渡す。父の愛用のグラブだ。そう言えば、父も、ジェイジェイが亡くなってから、このグラブと同様に、ちじんでしまった気がする。自分は、光沢があり、しなやかに動くグラブをつける。

「いくよ」
　ハヤテは、ウォーミングアップも兼ね、山ボールを投げる。ボールは、大きく弧を描き、父のグラブの中に吸い込まれた。
　父は思う。親子のキャッチボールは、これで何度目だろう。確か、ハヤテが、つたえ歩きをしだし、あやすために、ゴム製のプヨン、プヨンボールで遊んだことが始まりのはずだ。
　「ほら」とボールをハヤテに向かって投げたとき、ハヤテは、両手を出して、ボールを捕まえようとするが、まだ、反射神経が十分発達していないため、手が交錯する。掴みきれなかったボールは、柔らかい皮膚で覆われた顔面に当たる。
　一瞬、顔を歪めるわが子。今にも泣き出すのではないかと心配になり、慌てて近づくが、直ぐに「あばばばば」と笑い声を上げ、両手を振って喜んでいる。顔に当たって、足元に転がったボールを拾い上げ、さっきより近くからボールを投げる。いや、手渡すといってもいいくらいの距離だ。
　両手を差し出す子ども。だが、今度も、手は空気を掴んだだけだ。赤らんだほっぺに、もうひとつのほっぺが、一瞬、くっつく。そして、再び、笑い声が部屋にこだまする。その声に呼応して、子をあやす父も微笑む。笑いの伝染、喜びの連鎖反応、温かい空気が、蒸気のように部屋全体に充満する。笑いをせんとや生まれけん、キャッチボールせんとや生まれけん。
　例え、言葉が話せなくても、言葉が通じなくても、心と心のキャッチボールは可能なのだ。いや、キャッチボールを望んでいるのだ。まずは、こちらから、心を投げかければ、必ず、相手からの反応はある。それが、必ずしも好意的なものでなく、冷笑や嘲笑、果てまた、何の返事もない、無視の行動かもしれない。
　それでも、彼は、笑顔というボールを投げ続ける。目の前三十センチのぬいぐるみの犬にも、一メートル先の父親にも、台所で、夕食の後片付けをしている母親にも。笑顔光線は、地上の果てを、そのまた果てを通り越え、地球を一周して、再び、彼の元に戻ってくる。サンタクロースのように、世界中に向けて、放射線状に放たれた微笑みのお土産箱は、誰の元にも贈られる。あなたが気づくかどうかだ。

　九回裏

「父さん、父さん」
　息子の大声に、父は、現実へと舞い戻った。
「早く、ボールを投げ返してよ。父さんが、ずっと持ったままでは、キャッチボールにならないよ」
「ああ、そうだな」
　彼は、グラブの中のボールを、人差し指、中指、そして、親指の三本で、しっかりと握り締める。このボールに、自分のすべての愛情を注ぎ込んで、息子に、そして、その子どもに伝えるのだ。
「いくぞ」

ここ何年間で、もっとも大きな声を出した。やがて自分の記憶から消えていく父に、今後の将来を託した息子に、そして、まだ見ぬ、我が孫に。

ボールは、声に負けまいと、ここ何年間か、投げたことのないスピードで、息子のグラブを射抜いた。

「父さん、すごいじゃないか」

父は、唇の端を上げ、にこりとした。息子は、大きな口を開け、笑い声を放った。

キャッチボールは、永遠に続く。

翼、ハヤテ、マタ、アイマショウ！

仏壇に飾られているジェイジェイの写真は、笑ったままだ。